

図書館・文書館の国際動向2017

(中村) みなさま、お集まりいただきありがとうございます。今日は、図書館・文書館の動向について、国際会議にこの夏出てきた3人がそれぞれ報告をして、今、国際的にどんなことが議論されているかというのを、学生さんや、今日、外からいらしてくださっている方もいらっしゃるのですが、みなで議論したいと思います。(中略)

中村百合子「第83回国際図書館連盟年次大会参加報告」

私は、この夏、国際図書館連盟という連盟の国際会議に出て参りました。

国際図書館連盟というのはですね、International Federation of Library Associations and Institutions という、IFLA と呼ばれる団体のことなのですね。それを日本語では国際図書館連盟と簡単に訳しているかと思います。で、これはですね、基本的には、図書館協会の、ま、連盟という

ような構造のものですよね。ここの Federation of Library Associations and Institutions って書いてあるから、図書館協会でしょう、Library Associations はね。ですから、図書館関係の協会の集まりというようなのが一義的な意味だと思います。この IFLA の目的として書かれていることとして、図書館情報サービスとその利用者の利益を代表する、そういう国際的な連盟ですよというふうに定義がされています。で、世界 140 か国以上の、1400 機関が登録しているというふうに彼らがいちおう報告しています。もう歴史が長いわけですね、で、今年 83 回の会議が開かれているわけなのですから、まあ、最初に発足したのが、スコットランドであることでも、ちょっと推測できるかもしれませんが、基本的にヨーロッパの集まり、というような印象ですね。で、公用語が Arabic, Chinese, English, French, Germany, Russian それから Spanish というふうに書いてあるのですけれども、大きめの部屋での会議に関しては、この公用語のうちのいくつかの同時通訳が入って、公用語としての、なんていうかな、聞く人、参加する人、発表する人の権利も保障するような構造にはなっています。で、年次大会は、World Library and Information Congress というわけですね。

その 83 回大会に行ってきたと。今回、行ったのがこのポーランドのワロツワフという街なのですから、この地図を見ていただいたらわかるように、今、ポーランドというのがこちら、ここは東欧があつて、ここにロシアがあるわけですね。で、って考えますと、このポーランドのワルシャワがここなのですから、この中心からだいぶドイツとチェコに寄ったあたりが、開催地でした。ですから私、実はですね、去年、2 回、ポー



ランドに行っていて、1回はワルシャワとですね、それからクラクフっていうですね古都に行ったのですけれども、クラクフの近くにアウシュビッツがあります。その時に見たこのワルシャワとかクラクフと、ヴロツワフはだいぶ違う街でした。本当にドイツの影響が非常に強い町だなあというふうにして、図書館のインテリアとかですね、実践も、ドイツの影響を受けているなという印象を受けました。ワルシャワで見た図書館とは全然、違うタイプの図書館で、ワルシャワで見た図書館はロシアの図書館、私が昔、ロシアに行ったときに見た図書館と非常によく似た雰囲気だったので、ヴロツワフで今回、見た図書館はドイツ的な図書館だなと思いました。

この大会なので今回は3,100人が行って、集まってですね、で、国会図書館の人たちなんかも来ていて、日本から56人の参加者があったというふうにこの前、国会の人が書いているのを見たのですけれども、私はこの中にカウントされているかわかりませんが、毎年、けっこう日本人がこうやって何人か、何十人か、行っているわけですね。登録料がただし非常に高額で、1週間の会議なので、まあ8万円、今回でしたらしていますので、そう簡単には行けないかなあと思います。私も大学からもらったお金では足りずに当然、私費を追加投入してというような状況ですね。スポンサーがいて、いろんな企業が入っているのですけれども、OCLCは図書館学の授業の中でも聞いたことがあると思いますけれども、世界で最大の書誌ユーティリティですよ。OCLCなんかが一所懸命バックアップしてですね、実現しているというような会議だと思います。では、次にいきますね。

私は、実は、このIFLAっていう団体の、学校図書館分科会というところの常任委員っていうのをやっていた時期があります。その時期に、原則として毎年、この会議に出ないといけないので、出ている時期があって、ですからここに、ここ十数年ですか、のリストをいろんなところでやっているってことであげたのですけれど、韓国のソウルでやったときから、けっこう連続して行っていたのですけれども、去年、アメリカのコロンバスであったのと、今年、ポーランドに行っていたということで、まあ久しぶりに最近、行っているというような感じです。

2005年以降のIFLA大会開催地 *が中村参加回
IFLAホームページより (HTTPS://WWW.IFLA.ORG/ANNUAL-CONFERENCE)

・ 2005 ノルウェー・オスロ	* 2012 フィンランド・ヘルシンキ
* 2006 韓国・ソウル	* 2013 シンガポール
* 2007 南アフリカ共和国・ダーバン	・ 2014 フランス・リヨン
* 2008 カナダ・モントリオール	・ 2015 南アフリカ共和国・ケープタウン
* 2009 イタリア・ミラノ	* 2016 アメリカ合衆国・コロンバス (オハイオ州)
* 2010 スウェーデン・ゴッテンハーグ	* 2017 ポーランド・ヴロツワフ
* 2011 ブエルトリコ・サンジョアン	* 2018 マレーシア・クアラルンプール

で、このヴロツワフの大会の会場なのですが、100周年記念ホールっていう名前がついていて、ライプツィヒの戦いの100年目を記念してつくったホールで、世界遺産だということなのなのですが。ワルシャワもそうですし、このヴロツワフもそうなのですが、立派な建物は基本的にロシアが作ったものなのですね。この100周年記念ホールっていうのは、プロイセン・ロシア等の連合軍がナポレオンを倒したというよう

2017年ヴロツワフ大会会場およびテーマ



・ 会場は、百周年記念ホール (Centennial Hall) という、ユネスコ世界遺産 (文化遺産)

・ 大会テーマは、「Libraries, Solidarity, Society」=「図書館、連帯、社会」

なですね、その100年を記念して建てたホールなわけで (ヴロツワフは当時、ドイツ帝国の支配下)、世界遺産になっています。それで、これが、開会のときのセレモニーなのです

けれども、今年の年次大会のテーマはですね、Libraries, Solidarity and Society.というこ
とで、「図書館、連帯、社会。」というテーマになっています。これ実はですね、去年、アメ
リカのコロンバスでやったとき、まったく同じ大会テーマで、同じテーマが2年続く、使わ
れるなんてというのは、私はあるのだなと驚いたのですが、なぜか同じテーマでした。

248のセッションがあって、私、主に出たものをここにリストアップしたのですけれど、今日はこのあと、この出たセッションのうちの、興味深かったものをいくつか、紹介したいと思います。私は、常任委員をしていたころは、学校図書館分科会の内容に責任もあったし、そういうものを一所懸命出していたわけですが、最近、私費まで投じてですね、出る場合には、自分が普段勉強している分野というよりは、どちらかという自分
が勉強不足を自認しているような分野のセッションに出ているいろいろ聞こうというふうに決めています。で、iPLANNER (<https://2017.ifla.org/conference-programme>) というの
がありましてですね、スケジュール管理ができるようになっているのですね。これ、こうク
リックするとログインできて行きたいところに印をつけられるという、そういうツールがあるのですね。ですから248もあって1週間あるので、どの日にどこに行くかなってというのは、このiPLANNERっていうのを使って、こういうふうに色づけして、準備するわけですが、行くところを決めて。あと、私はですね、23日まではまじめにというか4日連続で会議にば
んばん出ましていろいろ聞いて。24日以降はいろんな図書館見学に行ったりしました。

参加セッション			
	8月20日	8月21日	8月22日
10:30-12:00 Opening Session	10:00-11:00 Librarians' Commitment to the UN 2030 Agenda for Sustainable Development: Environmental Sustainability and Libraries SIG Poster Sessions	11:00-12:00 Understanding Your Users: How the Inside Out A Workshop in User Assessment - Social Science Libraries with Blog Section	11:00-12:00 Engaged Communities: Practicing the Librarians Role - Library Theory and Research with Film Professional SIG
12:45-13:45 Lunch in Three of Our Historical Perspectives - Library History SIG	12:00-12:45 Exploratory Meeting to Establish a SIG - Knowledge Management in Global and Disaster Health	12:00-12:45 Prison Library Tour (optional)	12:45-13:45 IFLA Biblioteca International Library Marketing Award Winners Present - Management & Marketing
13:45-14:45 Lunch	13:00-13:45 How to use VR and Multimedial Experiences to Increase Resilience - Prison Society of Virtual Reality	13:45-14:45 Branding: Building, Testing and Selling the Space Story: Library Buildings and Equipment with Management and marketing	14:45-15:45 Lunch

- ・ 連日番号で248番までセッションがあった
- ・ 「自分が勉強不足を自認する分野のセッションに参加する」を方針と今年決めた
- ・ 8月19日に到着して、20日から3日まで大会セッションに参加した
- ・ 24日は臨時の図書館見学会に
- ・ 8月20日 大津市立図書館の歴史を調査した
- ・ 8月21日 大津市立図書館の歴史を調査した
- ・ 8月22日 大津市立図書館の歴史を調査した

印象に残るセッションを四つ紹介したいと思います。ひとつはですね、LIBRARIES IN TIMES OF CRISIS という、HISTORICAL PERSPECTIVES っていうことで、歴史研究をしている人たちが集まったセッションなのですが、私自身は図書館史をやっているつもりで、学校図書館の歴史を研究しているわけなのですが、それでこのセッションに出たわけですね。四つめで、ここにあげてあるのですけども、

印象に残るセッションと発表 (1)	
LIBRARIES IN TIMES OF CRISIS: HISTORICAL PERSPECTIVES - LIBRARY HISTORY SIG	
・ Buenrostro, Iyra S. and Johann Frederick A. Cabbab. "Persistent Resistance: Libraries in the Philippines and their Fight for Freedom and People's Rights"	・ 個人的な研究関心と一致。四つ目は私の博士論文と同様の研究。アメリカがいかに第二次世界大戦後の世界の図書館の復興・発展に影響をもったか
・ Hury, Ribeye. "Bibliocausts of Somali Libraries: Retelling the Somali Civil War"	・ それ以外の発表は、マルコス大統領が戒厳令をひいたフィリピン (1972-1981) での資料の保存・提供におけるライブラリアンたちの抵抗。ソマリアの図書館や文書館が2011年の内戦の最中を乗り越えて存続した。また、ライブラリアンに対するライブラリアンたちの奮闘、イラン・イラク戦争下のイラン国立図書館が経験した資料の移管・保存に関するインタビュー調査
・ Payar, Parisa and Fariborz Khosravi. "National Library of Iran in the Midst of War of the Cities"	⇒ライブラリアンたちの連帯、国際的な支援・協力の重要性
・ Sroka, Marek. "Continuing Solidarity with Our Colleagues in Eastern Europe: The American Library Association (ALA) and the Postwar Rehabilitation of Eastern European Libraries, 1945-1947"	

American Library Association がですね、東欧の図書館の復興っていうことに対してどう
いうことをしていたかということ歴史研究で明らかにした研究だったので、つまりこの
四つめは私の研究関心と完全に一致するものなのなのですが、それ以外がどうい
うものだったっていうとですね、一つめが、フィリピンでマルコス大統領、マルコス大統領のご夫人は
みなさんご存じですよ。靴を集めていた人いますよね。まあ、ああいう(笑)、マル
コス大統領が戒厳令をひいたときのフィリピンで、ライブラリアンたちがどのように知的自由
のために抵抗していたかというような内容ですね。それから二つめはソマリアの図書館や文
書館がですね、内戦下にあつて bibliocaust っていう言葉を初めて聞く人も多いかと思
いますが、本を記録を根絶やしにするとかいう意味ですよ。その bibliocaust のよ
うなことが起きたわけですね。そういうような状況下にあつて、ライブラリアンたちがどうい
うふう

資料を保存して次の世代に伝えるためにですね、隠したり、どっか持っていたりしているわけですね、そういうような活動にどのようなものがあったかという報告。それから、イラン・イラク戦争下のイラン国立図書館の研究。資料の移管や保存に関わる実践の報告といったようなものがある、写真なども見せてくれて、非常にリアルな、ライブラリアンたちがどのよう連帯して、国際的に支援、協力をしながらですね、資料というものをこれからも守っていくのかというような議論ができた、というふうに理解しています。

もうひとつ印象に残るセッションとして、これはですね、LIBRARIES' COMMITMENT TO THE UN 2030 AGENDA っていうね、FOR SUSTAINABLE DEVELOPMENT ということで、SUSTAINABLE DEVELOPMENT については、いろいろな大学の授業の中で聞いている人も多いと思うのですが、持続可能な社会ですね、そういう社会をつくっていくというような、国連のアジェンダがあるわけですね、方向性

で、まあやっていくことのリストですね。それに対して、なにか図書館にできることはあるか、という報告だったのですが、フィンランドのヘルシンキの公共図書館から来た人が、発表してくれて見せてくれたこの IFLA Green Library Award というのがあるそうで、去年の受賞した図書館の YouTube を見せてくれていろいろ紹介してくれたので、ちょっとそれが面白かったのでそれをお見せしたいと思います。これが、この、Cockburn Integrated Health…(<http://www.cihealth.com.au/>) っていう書いてあるのですが、今からお見せするのは、この Cockburn という、オーストラリアのある町で、ヘルスケアセンターを中心とした、大きな建物の中に、図書館が入っているのですが、要するに、SUSTAINABLE DEVELOPMENT、持続可能な発展ということ視野に入れて、町の公共施設をつくら取り組みの中で、図書館がどう位置づけられているかということですね、見せてくれる YouTube なのですが、ちょっと一瞬待っていただいて…

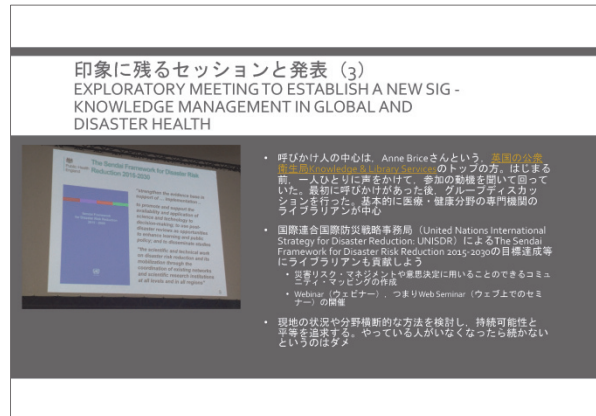
(<https://youtu.be/x9Qg0r5E9ys> を視聴)

まあ、bicycle stand があるよとか、そういう、なんか、どこにもあるみたいな話もいっぱいあるわけなのですが…これからまあ、公共図書館の中に入っていきます。これが energy smart とかって言って。省エネ環境に配慮したような、シェードっていうのですかね。電気自動車のスタンド？電気をいれるスタンドがありますよとかっていう。あ、もうここから公共図書館に入っていきます。さっきのシェードは、今度は内側から見ている状況ですね。LED のライティングですって出ているのですが、いろんな場面でこう、環境に配慮しているっていう。Wi-Fi が環境に入るとしてるとかちょっとよくわからないところもあるのですが、5 万冊ってけっこうもっと大きそうな図書館に見えますけど、これがドローンで撮ったもので、なので、プレゼンテーションのこのビデオが上手に作れているってこともおそらく含まれていると思うのですが、この Cockburn というところですね、公共図書館が賞をもらって、Green Library Award っていう賞をもらったというような、そういう話とかですね、それ以外にもほかにビデオを見せてもらってですね、ここ (<https://www.ifla.org/node/10478>) にあがっていますけれども、受賞した他の図書館の取り組みなんかも紹介してくれました。この Cockburn という医療センタービルの中に、公共図書館



も入っていますよというの他にですね、スウェーデンの小さな町の公共図書館の実践と、それからドイツのこの BookBoXX か。という実践、これはですね、公衆電話のボックスをリサイクルしてそれで本を町で貸すというような実践で、これドイツではじまったらいいのですが、ポーランドでもやっているようで。日本でいう、駅の中に、こういう、本を共有して、みんなが借り出していく、そういうようなコーナーってありますよね、無人の。そういうような取り組みがドイツにあるというのがいちおうエコな実践だというような報告がありました。やっぱり北欧の人とか北米の人がやっぱり、こういう、Green Library みたいな実践のセッションには多いですね。かな、と思いました。

もうひとつ、三つめですね、これはですね、EXPLORATORY MEETING って書いてあるのですが、何かって言うと、新しい SIG っていうのは何かって言うと、Special Interest Group っていう、いろいろな関心を共有する人たちが、IFLA の中に小さなグループを作るわけですね、そうするとセッションをもて、もてるといふかセッションをもつわけなのですけど、それでですね、このセッションは何かというところ、



KNOWLEDGE MANAGEMENT IN GLOBAL HEALTH っていう、そういうことに関心をもつ人たちが集まった Special Interest Group を立ち上げましょうというセッションに私、出てきました。イギリスの公衆衛生の機関でですね、国立の公衆衛生機関の、ライブラリアンのトップの方が中心で、最初、私、座ってたらず、一人一人に声をかけてなんでここにきたのとか言って、学校図書館の研究者がなんでこんなところに来たのって聞かれて、まあ日本は disaster の国だから、みたいな話をしてですね、こういう問題に関心をもっていく必要があるし、参加する必要があると思ってるっていうような、動機を言ったりしたのですけれども。この国際連合の国際防災戦略事務局というのは、帰ってきて調べたら、日本の神戸に事務局があるらしく、神戸でアジェンダを作ったこともあるし、要するに 1995 年ですね、阪神淡路大震災が起きたあとの 10 年間の。それから、その後、この前の東日本大震災が起きているから、そのことをふまえた仙台の The Sendai Framework for Disaster Risk Reduction っていうですね、2015 から 2030 ということ。実は、ですから、1995 のあとに作ったのと、それから 2011 年のあ後に作ったのということで非常にエポックメイキングなできごととして、UN の、国際連合の機関がアジェンダを作っていると。[そういう] フレームワークを作って活動しているという中で、ライブラリアンもそれに貢献しましょうということで、災害リスクマネジメントとか、意思決定、そのことに関わる意思決定にですね、ライブラリアンは何ができるかというようなことを考えるということで、例えばコミュニティにどんなリソースがあるかのコミュニティ・マッピングとか、それからウェビナー、つまりウェブセミナーを開催して災害リスクマネジメントに関わってライブラリアンがセミナーを開催するとかですね、といったようなことを今後していきたいというような提案がありました。ただ、これ、持続可能性と平等っていうのは非常に難しいと。やっている人がいなくなったら続かないとか、それから平等に、何が平等な情報アクセスとか、リソースの分配とかですね、災害に遭ったときにどうやってリソースに関する情報を流すかっていうのは、平等な被災者の支援ということに、どういうふうに活かしていけるかってすごく難し

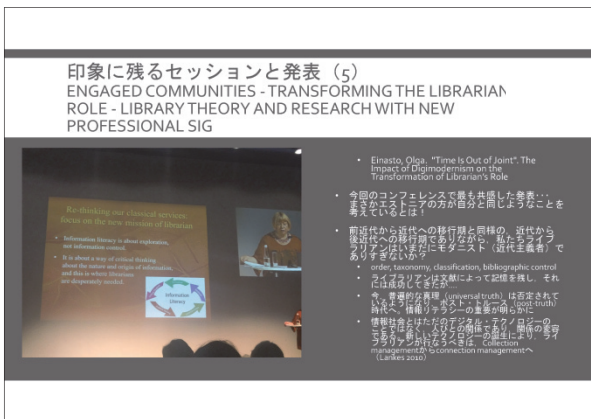
い問題ですよね。だからそういったようなことが、今後、議論すべき課題であろうというような話題が出てきたりしました。私、これは今後とも参加したいなと思ったりしました。

それから、もうひとつ印象に残るセッションとしては、ヴァーチャル・リアリティのセッションなのですが、これちょっと、この前、サンドラ (Dr. Sandra Hirsh) が来たときにサンノゼ公共図書館です、ヴァーチャル・リアリティのツールを業者さんが提供してくれてきたものを使ってやっているイベントを紹介してくれたと思うのですが、それに関わってここでも YouTube をいっこ見せてもらったのですが、もうひとつちょっと違うタイプの YouTube でへえと思ったものがあったので、ちょっとここで一緒に見てみたいと思います。

(<https://www.youtube.com/watch?v=xlmDfU9SXYQ> を視聴)

図書館がこれから雑誌というものをどういうふうに見るか。資料とか。という、まあデモですね。1冊置いたら、違う号が出てきたという構造になっていて。これ、Google のデザイナーの人が自分で作ったものらしいのですね、この YouTube は。だから公共図書館でどうこうっていうのは、このウェブのデザイナーの人がですね、今後こうなるのじゃないのっていうのを考えてやっているという話で、まだ Google のデザイナーの人が1人で考えているような内容だと思うのですが、私は可能性があるなと思いました。今、アマゾンの Kindle とかそれから Google などにもこれに近いような機能はいっぱいあると思うのですが、これが公共図書館で実際に今のようになると、けっこう面白いのではと私個人は思いました。

次に行きたいと思うのですが、最後ですね。実は、私が1番感銘というか衝撃を受けたのがこの最後に紹介する、ENGAGED COMMUNITIES - TRANSFORMING THE LIBRARIAN ROLE ということで、図書館のですね、理論研究をしている人たちのグループのセッションだったので、その中で、エストニアの人が発表した内容が、私が最近、考えていたこととまったく同じですごく衝撃を受けて、なんとエストニアのなんていうところに住んでいる人が私と同じことを考えているのかと (笑)。これが国際会議の非常にもしろいというか嬉しいところだと思うのですが、彼女の言ったことっていうのはですね、ここに書いたのですが、前近代から近代への移行期と同様の、近代から後近代への移行期に今、私たちはおそらくいるわけですよね。それにも関わらず、私たちっていまだにこう近代の発想だけで図書館を考えてるのじゃないかって、あまりにもモダニストではないかということと彼女が言ったわけなのですね。そこで言ったのが、例をあげたのが、この order, taxonomy, classification ですね、それから bibliographic control とかいったような、そういう近代的な発想でですね、資料組織を考えたり情報の組織とか、それから提供と



かってというようなことを私たちが考えてきたわけですよ。そこからどうしても移行できないのじゃないかっていうことを彼女は言ったのですが、答えがあるわけではないところが私と同じわけなのですが、まあここでライブラリアンは、文献によって記憶を残して、それに成功してきたと。しかし今、普遍的な真理、universal truth というのが、近代では、もしくは中世でも universal truth がある程度信じていくことができていたのではないかと。それが post-truth というような時代で、よくトランプがフェイクニュースフェイクニュースって言っていますが、フェイクニュースの時代、フェイクニュースの時代というか、truth ってなんなのだろうっていう時代なわけですよ、情報の世界が。そこにあって、今度、何が、図書館がすべきことになっていくのかっていうことを彼女は考えていると。正直に言って私と同じで考えているだけで別に何か言えることがあるわけではなくて。彼女はいちおう仮の、その日の提案は、情報リテラシーということに関わって、ライブラリアンがすべきことが、重要性が明らかになってきているだろうと。で、その情報社会ってというのはデジタルテクノロジーのことだけではなくて、その人びとの関係性の問題であって、関係の変容のことであるように、彼女は言っていたのです。新しいテクノロジーが誕生して、今、ライブラリアンが行うべきこととは、従来の collection management から、communication management に移っていくのだからっていうことが彼女の結論っていうか、彼女の言っていたことで、communication management っていうのはすごくなんとなく抵抗が私自身はあのちょっとこのコミュニケーションをマネージするっていう人なかなか。なんかコミュニケーションというとなにか私的なものがあるのかなと思うと、そういうところまで management されるかのように聞こえなくもないと思ったりして、何となく。この日の彼女のこの提案自体は、私はどうかなと思ったのですけれども（筆者注：collection management から communication management というのは筆者の誤解で、正しくは、collection management から connection management へ、と言っていた。communication という言葉もキーワードとして出てきてはいたが、違う文脈であった。この点、後半、質疑応答で指摘と応答があった）。私が考えていることと同じこと考えているのかと思ったのもやっぱり post-truth の時代というのとか、それから近代っていうものから、後近代っていうものに移行していくときのライブラリアンの役割、ライブラリアンはやっぱり少なくとも今の私たちは、今の彼女が言ったように、非常に近代主義的であったと。近代主義的な存在だったと思うので、それがどういうふうに変っていくのかなということについて、なんとエストニアのライブラリアンが私同様考えていた人というのが、とても嬉しいことでした。答えがあることではないです。

私は、24 日から図書館見学をしまくっていたので、それはブログに書いていますので、ブログをちょっと検索していただくとですね、うだうだと（笑）、どこに行っても書いておられます。では以上です。ありがとうございました。では次は古賀さんから。



古賀崇「第81回米国アーキビスト協会年次大会参加報告」

<p>第81回米国アーキビスト協会 (SAA)年次大会参加報告</p> <p>—図書館と文書館・アーカイブスとの 共通点・相違点も意識しつつ—</p> <p>「図書館・文書館の国際動向2017」 (2017年11月24日 立教大学池袋キャンパス)</p> <p>古賀 崇 (天理大学<図書館司書課程>教授) Email: tkoga@tenri-u.ac.jp Web: http://researchmap.jp/T.Koga.Govinfo</p> <p>1</p>	<p>本日の内容</p> <ul style="list-style-type: none">• はじめに：アーカイブズ（文書館）／アーキビストとは？• 米国アーキビスト協会（SAA）+αについて• SAA年次大会の全体像• 今回の大会で印象に残った点など• おわりに <p>2</p>
--	---

古賀でございます。本日は天理で午前中、授業を終えてきて駆けつけた、そんな状況でございます。普段は奈良の天理大学というところで図書館の司書の授業を担当しておりますけれども、今回アーカイブズ、文書館、アーキビストに関する話ということで、中村先生からお声がかかりました。アーカイブズ関係は、日本で学べるところ自体があまり多くはありません。2008年にこちらの隣の目白の学習院大学でアーカイブズ学専攻というのが立ちあがりまして、あとは筑波大学、九州大学などといった現状であります。私も学習院では、非常勤でアーカイブズ関係の授業を集中講義ですけれども持っております。本日は、米国アーキビスト協会の話をしていただきます。

<p>はじめに アーカイブズ（文書館）／アーキビストとは？</p> <p>3</p>	<p>大まかに述べると...</p> <ul style="list-style-type: none">• 組織・個人・家の「活動の記録」を対象とする• 「評価選別」により、「証拠」ないし「記憶」として残すものを判断する<ul style="list-style-type: none">• 「選書基準」との違いは？• 「時の経過」を意識したアクセス体制を整備する<ul style="list-style-type: none">• 「30年原則」• これらを専門的に行う「アーキビスト」 <p>4</p>
--	--

そもそもアーカイブズや文書館やアーキビストとは何かということから話をする必要があるので、中村先生からお話をいただいておりますけれども、そもそもみなさん、アーカイブズというのがなんなのか、イメージが何かわく方っておられますでしょうか。挙手をお願いいたします…あんまり、おられないかなって感じがしますが、これは要するに、ごく最近の、これ学校の話なのであまり、なかなか言いづらいのですけれども、森友問題、加計問題、そういったところでそもそも政府であったり、あるいはいろんな会社、企業などが一体どういうことやってきたのかということを検証できるように、そういった証拠を保つ、あるいはコミュニティ、地域の記憶を保つそのために記録を残していく、そういった役割があるという、そういうことだと私は理解しております。次にポイントをあげておきますと評価選別、appraisal という言い方をします。つまり組織、個人、家、これらの中で、こういったことをやってきたという証拠、あるいは記憶として残したいという、そのための判断基準、これもどういう判断基準がいいのかっていうことの議論が国際的にも延々続けられてきておりまして、いまだ決着を見ていないという。比較のために言いますと、図書


館での選書基準というのは、あらかじめ出版されているものを自分の図書館の利用者のニーズに沿うように選んでいく。しかしアーカイブズの評価選別というのは、館の外で、すでにあるものを選ぶというとは逆で、自分の組織や自分の家の中で生み出されてきたもの、そのなかから残すべきもの、あるいは捨てるべきものを選ぶ。何でもかんでも残すと收拾がつかみませんので、ちゃんと残したいものを選ぶことになります。それからアーカイブズ、文書館の世界ですと、今は公開しないけれども何年か経ってこれは歴史的な出来事を検証するために公開はできる、あるいは広くいろんな人に検証してもらって、今後のことを考えてもらおうという、そういう時の経過というのを意識したアクセス体制というのを考えています。一つ国際的な目安としては30年原則がありまして、これは文書や記録が作られて、遅くとも30年経ったらみんなが見られるようにしましょうという、そういう取り組みがあります。もちろんプライバシーとか病気といった大変センシティブな問題に関してはもう少しクローズにする期間もある。こういう取り組みをアーキビストは専門的に行うということになります。

ちょっと専門的な話になりますけども、実はアメリカでは文書館と図書館とのつながりというのがけっこう深いという状況があります。そのことを示した一例として坂口貴弘さん、この方も学習院で博士号をアーカイブズ学で取られた方ですけれども、この方の著作[『アーカイブズと文書管理』勉誠出版, 2016]を読んでいきますと、アメリカの図書館史は中村先生などからのお話が立教でも授業で出てきたかと思うのですけれども、まさに19世紀末あたりに、アメリカの図書館の仕組みができあがってくるわけですけれども、それをもとにして例えば図書館関係の学校でも文書館やアーカイブズのことを教えるようにするとか、あるいは関連する企業にしても例えばカードを整理する仕組みを応用して、文書も整理する仕組みを売り出すといった、そういった取り組みが実はなされていたと、そういったことを坂口さんは検証されているということでもあります。

それから最近ですと米国でもこんな本[*Archives in Libraries*, Society of American Archivists, 2015]があり、この表紙がある意味言いたいことを物語っていると思うのですが、図書館がこんな感じで書棚があり、文書館はこんな感じで、文書や記録の箱を並べる、その両方に橋をかけるにはどうすればよいのか、といったことについて、この本のようにかなり意識的に取り組んでいるという事情があります。

米国における図書館とのつながりを知る(1)

- ヨーロッパにはじまる現代的アーカイブズ理論・実践の米国・日本への「翻訳」の状況を描く
- 米国では19世紀末より図書館界からの支援が成される
- 古賀の書評(学習院大学『GCAS Report』Vol. 7, 2017)
- <http://hdl.handle.net/10959/00004257>



膨大な記録情報を管理するために編纂された、米国、そして日本での苦闘。記録と証拠も重視される今、求められる「アーカイブズ」

(勉誠出版, 2016)

5

米国における図書館とのつながりを知る(2)

- 米国の公共・大学図書館を主に意識し、アーカイブズ設置のための理論と手順を紹介
- 古賀の紹介(『レコード・マネジメント』Vol. 70, 2016)
- http://dx.doi.org/10.20704/rmsj.70.0_111



(Society of American Archivists, 2015)

6

では今回行って参りました米国アーキビスト協会 (SAA) そのものの説明をしてみたいと思います。実は Core Values というのがなかなか日本では知られていませんし、それが紹介される機会もない。どちらかと言えば協会の倫理綱領として、図書館員としてはこういったことを守らなくてはいけないということは言われてきておまして、日本の図書館協会も倫理綱領はありますけれども、その基盤として Core Value ということで、つまりアーキビストの専門的な役割というもの、あるいは価値というのはこういったところにあるというのを明記していくという、そういった取り組みを SAA は行っている。実はアメリカ図書館協会も同じように Core Value ということを定めております。このことも先ほど提示しました *Archives in Libraries* に、アメリカの図書館協会とアーキビスト協会がそれぞれ Core Value を持っているという記述もあります。SAA の委員会と分科会、特に委員会のなかののダイバーシティはかなり、SAA という団体として意識的にやってきている、このことは追々、また話をいたします。求人・求職も大事な役割としています。

教育・研修という観点でいいますと、アメリカ図書館協会はその協会が認証するプログラムを修了している人でないとライブラリアンとしては認めないとしていますけれども、SAA はそういった仕組みはとっておりません。専門職を保証する仕組みというのは、また別に設けております。実はそのアーキビストを教育するコースというのは、歴史学コースにもありますけれども、ほとんどは、iSchool と呼ばれる図書館情報学を基盤とするコースに設けられています。有力校をここにあげておりますけれども、いずれも、図書館、ライブラリアンのコースをもってあります。それから博士課程ももっておりますので、図書館、アーカイブズそれぞれの研究者もここで巣立っていくという、そういった体制ができております。

米国アーキビスト協会 (SAA) について

関連する国・地域・国際団体もあわせて

7

SAAの業務など

- 専門職としての中核的価値 (Core Values) と倫理綱領の制定・運用
- 各種委員会
 - 教育・研修 (デジタル・アーカイブズ・スペシャリスト (DAS) と大学院教育の小委員会を並置)、政策、広報、多様化 (Diversity)、標準 など
- 分科会：館種や業務ごとに分かれる
- 協会としての学術雑誌 *American Archivists* やテキストブックなどの刊行
- 求人・求職情報の集約・提供 など
- 詳しくは：<https://www2.archivists.org/>

8

米国でのアーキビスト教育・研修とのかかわり(1)

- SAAは大学院教育 (修士レベル) のガイドラインを提示 (2016年版が最新版)
 - <https://www2.archivists.org/prof-education/graduate/gpas>
 - 米国図書館協会 (ALA) のような認証制度は取らない
- アーキビスト教育のコースはiSchoolに置かれることが多い
 - 図書館情報学を基盤としつつ、広がりをもつ
 - 図書館員教育・アーキビスト教育を並置
- 有力校：ミシガン大、テキサス大オースティン校、UCLA、シモンズカレッジ (ボストン)、ピッツバーグ大など
 - SAA年次大会で大学院生からの発表、教員・卒業生の懇親会などを実施

9

米国でのアーキビスト教育・研修とのかかわり(2)

- アーキビスト資格は、SAAから独立したAcademy of Certified Archivists (ACA) が認定 (試験に基づく)
 - <https://www.certifiedarchivists.org/>
- SAAによる認定資格 (現職アーキビスト向け)
 - デジタル・アーカイブズ・スペシャリスト (DAS) 資格
 - ボーン・デジタル記録をアーカイブズとして扱うための知識と技術の習得を証明
 - 整理・記述 (A&D) 資格
- いずれも講習会参加 (年次大会内またはオンライン) による単位取得と筆記試験合格が要件
- SAA年次大会自体を「専門職としての継続教育の場」と位置づける

10

専門職をどうやって認定するのかということについては意外と歴史が浅いのですけれども、1989年にAcademy of Certified Archivists (ACA) という組織が設立されました。要するに、SAAとはまた別に専門職を認定するためだけの組織を改めて作っているという。そこが試験を課しまして、ある程度の点数が取れば Certified Archivist ということで認定をされる。日本からでも受験できまして、現に受験をしてこの資格を取ったという体験談も実はあったりしております。あとはこれとは別に、現職のアーキビスト向けにデジタルのアーカイブズを扱う人向けの資格と、整理・記述に特化した資格もまた用意しているという現状でございます。

先ほど言いました、この体験談というのが、筒井弥生さんという方が書かれておまして、この方が受験して、合格したという経緯があります。もうひとつの文献として森本祥子さんも、米国でのアーキビスト養成についてわりとまとめているという、そういう状況でございます。

あと各国・地域の状況を見ると、ここにあげている国々 [カナダ、英国・アイルランド、オーストラリア] がわりと活発ではないかと。特にオーストラリアは、アーカイブズや記録管理に関する国際標準というものの骨格を作ったという、そういったことで国際的にもリーダー的な存在となっております。

先ほど中村先生から IFLA の話がありましたけれども、アーカイブズの世界では ICA という国際団体があります。これとあとは博物館関係ですと ICOM という団体がありましてこれが再来年の 2019 年の 9 月に京都で国際大会を開きます。もうひとつ、ICOMOS という、遺産や遺跡に関するところが国際的に集まる団体がありまして、IFLA、ICA、ICOM、ICOMOS この 4 団体が、幅広く文化資産という観点で、とくに UNESCO と結びついて国際的な活動をやってきています。例えば資料の保存に関して、こういった 4 団体と UNESCO とが協働したガイドラインを発表したりといったことをやっております。あと、ICA はアーキビストよりも施設が中心となる団体です。こちらは 4 年に一度の世界大会を開催しております、2004 年がウィーンだったのですけれども、このところアジア圏、オセアニアやあとは中東で開催や開催予定となっております、こういったところが力を入れているということがわかるかなというところでもあります。

米国でのアーキビスト教育・研修とのかかわり(3) : 主要参考文献

- 森本祥子「これからのアーキビスト養成の課題についての一考察：アメリカの現状をふまえて」『研究年報（学習院大学文学部）』No. 56, 2010, p. 227-246.
• <http://hdl.handle.net/10959/2635>
- 筒井弥生「米国の認定アーキビスト・アカデミー (ACA) について：認定試験を受験して」『GCAS Report』Vol. 2, 2013, p. 118-122.
• <http://hdl.handle.net/10959/3748>

11

各国・地域の状況

- 米国のほか、以下の国・地域の協会活動が活発な印象
- カナダ Association of Canadian Archivists
<https://archivists.ca/>
- 英国・アイルランド Archives and Records Association <http://www.archives.org.uk/>
- オーストラリア Australian Society of Archivists <https://www.archivists.org.au/>

12

国際団体としての「国際アーカイブズ評議会 (ICA)」 <https://www.ica.org/>

- 専門職としてのアーキビストよりも、アーカイブズの施設・機関・協会の活動が中心
- 世界大会は4年に1度開催
 - 2008：クアラルンプール、2012：ブリスベン、2016：ソウル（2020：アブダビ）
- 地域支部も各地に有する
 - 日本は東アジア地域支部 (EASTICA) のエリア

13

では SAA の大会のことを申し上げます。今年 は 7 月にオレゴン州のポートランドで開催されました。成田からだとポートランドに直行便がありますけれども、もしいろんなところに寄って行こうという場合は、シアトルやバンクーバー経由の便をとれば、いろいろ行けるメリットもあるかなと思います。参加者は 2000 名以上と SAA が報告しています。参加費は、先ほどの IFLA と比べると若干安い。それからもうひとつポイントとしましては、本会議だけでも 50 以上のセッションがありまして同時並行ですのでどうしても行けないというセッションがあるという、そういう人たちのために大会の後で、今回は 9 月末までに各セッションの録音ファイル、それを認めていないセッションもあるのですが、録音ファイルをダウンロードできるという、そういうところも参加費に入ってきております。それから先ほど中村先生が言われたのと同じようなアプリでスケジュール管理、そういったことが行えました。

大会の全体的なイメージ[メインビジュアル] もつくられ、ウェブサイトは現在も公開されております。

大会は、だいたいは大まかに 2 段階に分かれております。毎年そういったかたちになるのですが、前半は本会議の前に、先ほどお伝えしましたアーキビストのための認定資格の試験をやる、それから一部の資格に関しては講習会を受けることが資格の要件になりますので、それも行っていく。あとは分科会が独自の会議を行ったりしてありまして、見学会も前半の段階で行われている。後半、今回二日間だけだったのですが、ここでさまざまな、よくある国際会議にあるようなセッションや展示や懇親会をやっている。あと最終日に今回、特別に一つのテーマ、これはあとでちょっと詳しく説明しますが、Liberated Archives Forum というテーマに即した特別プログラムを今回は開催

SAA年次大会の全体像

14

SAA2017年次大会について

- 開催日：2017年7月23日（日）～29日（土）
 - 古賀の参加は26日（水）より
- 開催地：オレゴン州ポートランド
 - 主会場：ポートランド・コンベンションセンター
- 本会議は27日（木）～29日（土）
- 参加者 約2050名
- 参加費 409 USドル（非会員、北米以外からの参加、早期申込割引 という条件で）
 - 各セッションの録音ファイルを、会議後の一定期間内にダウンロードする権利も、参加費に含む
- 参加者用スマホアプリを提供
 - 参加セッションのスケジュール管理 など

15



16

大会の概略

- 前半（23日～26日）はASA・SAA認定資格（前述）のための試験・講習会、分科会会議など
- 後半（27日・28日；本会議期間中）は講演、テーマごとの発表セッション、ポスターセッション、企業・団体からの展示、懇親会など
- 最終日（29日）は「Liberated Archives Forum」と題する特別プログラムを開催
 - 講演、小テーマごとのセッション、「アンカンファレンス」（テーマは当日指示）

17

をいたしました。

主会場の様子をお見せします。会議中の様子の写真を今日はお見せできないのですが、こちらご存じのキング牧師などをかたどった彫像ですけど、これは実はオレゴンで特別な意味を持っている。なぜかという、オレゴン州はもともと人種や奴隷制の問題を避けるために、ホワイトオンリーの州として設立をされたという、それが 19 世紀半ば [1859 年] の話になりまして、実は 20 世

紀、1920 年代 [1926 年] にオレゴン州の憲法が改正されるまで、黒人の居住は認められなかったという、そういった経緯があります。実は今もオレゴン州全体でいうと 8 割以上が白人が居住しているということで、リベラルで知られるオレゴンではあるのですが、実はこういった人種に関してはかなり偏りがある状況の中で、こういうダイバーシティのシンボルというのを会場前に置いている。それから男子トイレの画像ですが、“ALL-GENDER RESTROOMS AVAILABLE” ということを書いております。これも中村先生やほかの立教の先生からもお話が出ているかと思うのですが、アメリカは今、こういった性的指向に関しても寛容な州がだいぶできてきておりまして、いくつかの州ではトイレについてこういったものは認めないとすると州の規定で決めているところがありますけども、このオレゴンの会場および SAA としては、こういう環境をちゃんと用意しますということを明示しております。

それからこちらは受付の画像になります。この ACA というのが SAA とは別の専門職認定のための団体でして、こういったポスターがある。それからこちらの画像ですね、これも例えばファースト・タイマーとかプレゼンターとかそういったかたちでタグをネームホルダに貼るのですが、いろいろと面白いというか自分をこういったものでアピールするといったものがあります。例えば I'll walk with you. というタグはアメリカに住むムスリムを私は支援しますという、そのしるしということ。もともとは SNS 上のハッシュタグになっております。

それから分科会としましてはオレゴン州の歴史協会、historical society というのがアメリカの各地にありまして、これはだいたい歴史博物館を兼ねていますけれども、ちょうどケネディの展示会が行われておりました。日本でも 2 年ほど前にこのケネディの娘さんが駐日大使をやっていたところに日本の国立公文書館で展示をやっておりましたけども、やはり今もアメリカの人たちにとっ



ては、ケネディは大変特別な存在であるということが改めてわかりました。大統領選に立った時のキャンペーンソングみたいなものも披露され、展示に含まれていました。この歴史協会の建物の中で分科会のひとつが行われていたということでもあります。

それから懇親会ですけれどもこういった野外で、ちょうど7月あたりはあまり雨も降らないということで野外で用意をいたしまして、特にポートランドではフードトラックとかたちでランチタイムでは公園にいろんなエスニックの料理というのもトラックに載せてやってきておりますので、今回も SAA 大会のために実際にポートランドで営業しているフードトラックがやってきて、そこでいろんなご飯が食べられるというイベントがありました。

大会の中で印象に残ったことを少しお話してきたいと思うのですが、私は天理では、情報サービスや図書館情報技術論を教えておりますのでその方面の関心の中でちょっといろいろ見てきたのですけれども、やはりアメリカは図書館もそうだと思うのですがアーカイブズ・文書館としても自前で使えるツール、例えばオープンソースになっているツールであったり、あるいは業者が提供するツールであっても対等な立場で使いこなしていく、決して業者にお任せということではありませんし、要望はちゃんと伝えていくといったことをやってきている。業者が提供するシステムは吟味したうえで使っていくということで。これも日本でどれだけ知られているのかということがありますが、アマゾンには本を売るだけではなくて、実は今はクラウドサービスのほうでかなり稼いでいる、そういった現状があります。こちらガバメントのクラウドですけれども、それ以外の大学も含めた公共機関のクラウドもかなり展開をしております、特に電

懇親会の模様：ポートランド名物「フードトラック」の参加



21

今回の大会で印象に残った点など

22

情報技術とのかかわり方

- 「自前で使えるツールを活用」という姿勢
- 決して「業者任せ」にしない！
- 例：「デジタル・フォレンジック」（デジタルな文書・データ等の修復）にかかわるツール
- 業者が提供するシステムは、吟味の上で活用
 - 例：Amazon Web Service – GovCloud
 - <https://aws.amazon.com/jp/government-education/>
 - <https://aws.amazon.com/jp/govcloud-us/>

23

国立公文書記録管理局（NARA）の取り組み：特に前・現大統領の文書等の扱いについて

- 「政権移行期における大統領文書・行政文書の確保」は重要な課題とNARAでも認識
 - NARAウェブサイトでのガイドライン等の提示
 - 退職者、新任者に向けてのチェックリストの提示
 - TwitterほかSNS上のメッセージも保存対象として指示
- オバマ大統領時代のホワイトハウス・ウェブサイトは、NARAとして保存
 - <http://obamawhitehouse.archives.gov/>

24

子的な記録、電子文書に関してはこういったところで預けていくといった取り組みを、例えばテキサスの州政府のデジタルのアーカイブとして作っていくこともなされております。

それからやはり気になるのが、ナショナル・アーカイブズ [国立公文書館]、これも日本語訳がいろいろありますけれども、ちょうど、先ほど中村先生もちらりと言われておりましたけれども、トランプ大統領が就任して、じゃあその前のオバマとの関係をどうするのかというところで、オバマ大統領は今年の1月、ちょうどトランプ大統領の就任式の前まで大統領の身分であった。したがってその時点まで、仕事はホワイトハウスでやっていた。その最終日までのホワイトハウスのウェブサイトもそのまま、archives.gov という、ナショナル・アーカイブズのドメインで保存をしております。これは今もやはり大変アクセスは多い。なぜかといえば、まさにオバマ時代の政策を今後どうするのかということが、ちょうど今、議論されていますので、それまでやってきたことをちゃんと幅広く見てもらう必要があるということで残しているということでもあります。そういうことで、実際、ナショナル・アーカイブズの館長以下、スタッフは SAA の大会に出かけており、アーカイブズの取り組みを大会で伝えています。まず、政権移行期における大統領文書や行政文書をどうやって残していくのかという点について、やはりきちんと、ナショナル・アーカイブズの立場でガイドラインを出す。それから退職、新任、政治任用というのがありますし、民主党から共和党へという流れがありますので、それぞれ辞めていく人、入ってくる人に対して、こういったかたちでちゃんと自分の文書は整理してナショナル・アーカイブズに移管をしてくださいと指示し、そのためのチェックリストを出している。そして、Twitter ほか SNS のメッセージ、これもつい先日、トランプがとあるメッセージを消したとか言っておりますけど、そういったものもちゃんと保存の対象になることを指示しているということです。

Liberated Archives Forum というのが最終日に開かれておまして、これはあえて日本語に訳すと、政治的社会的圧力にとらわれないアーカイブズに関するフォーラムということで、これも図書館の自由という、アメリカ図書館協会が掲げているところと通じているのではないかと思います。より具体的に言いますとインクルージョンという取り組みをきちんとやっていくという。つまり、LGBTQ、民族、人種、ジェンダー、そういったところを集中的に扱って行って、その方面でアーカイブズでは何ができているか、何ができていないのか、そういうところを議論するということでセッションが複数行われました。

そのひとつとしまして Vanport という街を取りあげているものがありまして、それに参加しました。バンクーバーというとカナダが有名ですがけれども、実はポートランドのすぐ近くにもバンクーバーというのがありまして、バンクーバーとポートランドの真ん中にあるので Vanport という名前に

Liberated Archives Forumについて(1) : 概要

- 「(政治的・社会的) 圧力にとらわれないアーカイブズに関するフォーラム」と訳せる?
 - 「図書館の自由」にも通じる
- 社会的・人種的包含 (インクルージョン) を実現するためのアーカイブズ・アーキビストの役割
- SAAの現在のモットー "Archives Change Lives" を体現するフォーラム
- LGBTQ、人種、ジェンダーなどが、講演やセッションのテーマ

Copyright (C) 2017. Takashi KOGA. All Rights Reserved.

25

Liberated Archives Forumについて(2) : 古賀が参加したセッションより

- Vanportという、ポートランド近郊の「消えた町」
 - Vancouver (オレゴン州) とポートランドとの間に置かれる
 - 第2次世界大戦中に、工場労働者や退役軍人のための住宅地として開発: 約4割は黒人が居住
 - 1948年に洪水で壊滅 → 現在は公園
- ポートランドの公文書館や大学などの取り組み: Vanport Mosaic
 - 居住経験者らの参加により、Vanportの記憶と文化を継承
 - 「当事者のトラウマ」にどう向き合うか
 - <https://www.vanportmosaic.org/>

26

なっています。先ほど申しあげたとおり、オレゴンやはりホワイトオンリーという流れが強く、そこで、黒人などはいわば半ば強制的にここに住まわされたという状況があって、1948年に大洪水があってもう住めないという段階になりまして、今はまっさらな公園になっておりますけど、そこに住んでいた、当時やはり、いろいろなつらい経験もあったけれども、楽しい経験もあっただろう、そういった経験者の参加によって、記憶と文化を継承していく。ただその中で当事者のトラウマということでやはりこういったものを今、あえて残すのはどうかということとは当事者からの立場からもあるだろうし、そういったところでどう対処するのかという話などがあったりしました。

あともうひとつ、アンカンファレンスという、これもいろんな会議で、日本でもよく行われていますけれども、当日まであえてテーマを決めず、当日になってこのテーマで話し合いたい人は来てくださいという企画です。その中で、[アンカンファレンスとしての] テーマを忘れたのですが、ネイティブアメリカンの立場からの発言があり、国立のアメリカ・インディアン博物館としてオープンアクセスということで、資料の画像をオープンにするなどの取り組みをやっているけれども、我々の、ネイティブアメリカンのコミュニティにどれだけ還元してきたのか、それをきちんと考えなさいということを厳しく問い詰める、そういった一幕も目の当たりにしました。

では、ちょっと時間がおしていますので、最後に、この話で締めくくりたいと思います。

Timothy Snyder という、歴史家の方がおり、今はイェール大学の先生ですがけれども、もともとはちょうど中村先生が行かれたポーランドなどの中欧・東欧の歴史の研究をやってきておりますけれども、今年に入ってアメリカでごく短い、まさに 20 の

Liberated Archives Forum[について(3) : 「アンカンファレンス」より

- 当事者からアーキビストらに厳しい声も
 - ネイティブ・アメリカンから、国立アメリカ・インディアン博物館（ワシントンDC）の専門スタッフへ：「私たちの資料を持って行っておきながら、また資料の画像などの「オープンアクセス」と言っておきながら、私たちにどれだけ還元してきたのか」

27

おわりに
専門職の役割に関するメッセージほか

28

Greg Eow氏（MIT図書館）によるSAA年次大会での基調講演（27日）より

- Timothy Snyder著
On Tyranny: Twenty Lessons from the 20th Century (2017) からの一節を紹介
 - 池田年穂訳『暴政：20世紀の歴史に学ぶ20のレッスン』慶應義塾大学出版会、2017
<http://www.keio-up.co.jp/kup/qift/bousei.html>



29

『暴政』の「レッスン5 職業倫理を忘れるな」からの紹介

「孤立した個人と遠い存在である政府とのあいだで、倫理的な会話など望みうるのでしょうか？ 専門職なら両者を仲介してそうした倫理的な会話を生み出せるのです。ある専門職についている者たちが、自分たちのことを、共通する利害を持ち、常に共通の規範や規則を義務として負わされている集団なのだ認識するならば、彼らは信頼も、また現実にある種の力も勝ち取ることができます。」

- 専門職に対する米国での認識を示す
→ では日本ではどうか？

30

レッスンということで暴政に立ち向かう 20 の教訓ということ Snyder 先生がまとめられました。これはすぐに日本語訳が出ました [『暴政』慶應義塾大学出版会, 2017]。

そこで大会の中でこの本の一節が紹介された、まさにこういうことが、アメリカのアーキビストの見識を示すものだなということで、強く印象に残っております。その中で、「レッスン 5 職業倫理を忘れるな」という章でこういったことを言っているのですね。「孤立した個人と遠い存在である政府とのあいだで、倫理的な会話など望みうるのでしょうか？専門職なら両者を仲介してそうした倫理的な会話を生み出せる」…そういう専門職は共通する利害を持ち、常に共通の規範や規則を義務として負わされている集団である、そういうことで、専門職集団は、信頼も力も勝ち得ることができると。アーキビストもそうですが、それがアメリカの専門職に対する認識になっているのではないかと思うのですが、日本の専門職は果たしてどうなのかと感じざるを得ません。

実は今日、話せなかったところも多々ありまして、よりアーカイブズの専門的な話につきこんだ話が再来週またやる予定で、また天理で授業を終えてからやってくることにいたします。もしお時間がありましたら、北の丸の科学技術館でやりますのでこちらは参加自由でございます。もしお時間ありましたらお越しくくださいませ。では以上でございます。ありがとうございました。

<p>本日の話には続きがあります...</p> <ul style="list-style-type: none"> 「デジタルアーカイブサロン」(アート・ドキュメンテーション学会SIG) 第81回 12月8日(金) 18時30分～ 科学技術館(千代田区北の丸公園) 古賀からはSAA大会の様態を報告 <ul style="list-style-type: none"> 本日は話せなかった事柄を中心に 大会参加後の、プリティッシュ・コロンビア大学(カナダ・バンクーバー)への訪問の様態も含め ほかの海外での会議の様態なども 詳細: https://www.facebook.com/jadsdigitalarchivesalon/ <p>Copyright (C) 2017 Takashi KOGA. All Rights Reserved. 31</p>	<p>ありがとうございました</p> <ul style="list-style-type: none"> 今回の発表、およびSAA大会への参加は、以下の助成に基づきます。 <div style="float: right; text-align: center;"> 科研費 KAKENHI </div> <p>JSPS科研費 JP16K00454 「政府情報リテラシーの日米比較と教育内容の体系化に関する研究」(基盤研究(C)、研究代表者: 古賀崇)</p> <p><i>"In the long history of humanity the most precious spark is that of individual freedom."</i> Governor Charles A. Sprague</p> <p>オレゴン歴史協会そばでの、Sprague州知事(在位1939-43)のこぼ 32</p>
--	---

[古賀注: 当日のスライドは以下にアップ。]

<https://www.slideshare.net/takashikoga5439/81saa> また、「科学技術館」での発表(デジタルアーカイブサロン)のスライドは以下にアップ。

<https://www.slideshare.net/takashikoga5439/saa2017>

(中村) ありがとうございました。最後の暴政に立ち向かうのところは、私の話の、フィリピンのマルコス大統領の暴政なのか、に立ち向かったライブラリアンとかの、印象に残ったセッション(1)の話とほんとにつながるのですね。こういう専門職倫理みたいなものを、改めてみんなでなんていうか、確認し合う、Core Valueという言葉がありましたけれど、そういう場としても国際会議が機能しているのだと思うのですが。では最後は、国際会議ではなくて、ちょっと毛色が違うのですが、本学の図書館のサービス、利用者支援課? 利用者支援課の課長の原課長が私財を投じて(笑)、夏に研修に台湾にいらしたということなので、その報告をおうかがいいたします。お願いします。

原修「台湾図書館研修 2017 参加報告」

改めまして立教大学図書館利用支援課の原と申します。よろしくお願いいたします。

まず私の参加した台湾図書館研修がどのようなものかという話からさせていただきます。通常、「研修」というと機関から派遣されたりだとか、私でいうと立教学院の人事課が、その費用を支出してくれるなどが通常ですが、これは「台湾図書館研修 2017」という名前の、近畿日本ツーリストが主催する海外ツアーの名称に過ぎません。魅惑のゴールドコースト 7 日間みたいなものですね。ただし、企画の協力で書店の丸善、また図書館総合展というのが 11 月にありましたがその事務局が携わっています。ですので、ツアーではありますが、訪問先は図書館に特化され、個人の訪問とかでは見られないような場所の見学までコーディネートしてくれるような内容です。去年はアメリカ、また去年も今年も ALA の年次総会もこのツアーで訪れたり韓国に行ったりオーストラリアに行ったりなどしているようです。参加者 30 名程度でその内訳はこんな感じです。30 名程度の大人数での見学になりましたので、先方の説明を聞くのが精一杯で、なかなか個別の質問には時間が取れなかった面があります。よって多少欲求不満みたいなものが残ったのですけども。今日のシンポジウムのタイトルで、台湾の図書館の詳細の動きまで把握できると思っている方がいたら、最初に謝っておきます。私の報告内容では、表面的で学術的な分析は限られるかなと思っております。

訪問先としては、けっこうきちきちに詰まったスケジュールでいろいろ行ってきました。先ほど 3 泊 4 日と紹介しましたが、全部で九つくらいの施設を訪問してきました。都市としては、この台北から台中、高雄、新北（しんぺい）と言う都市にも訪れました。かなりいろんな場所の図書館を回ることができました。

台湾には行かれたこともある方も少なく

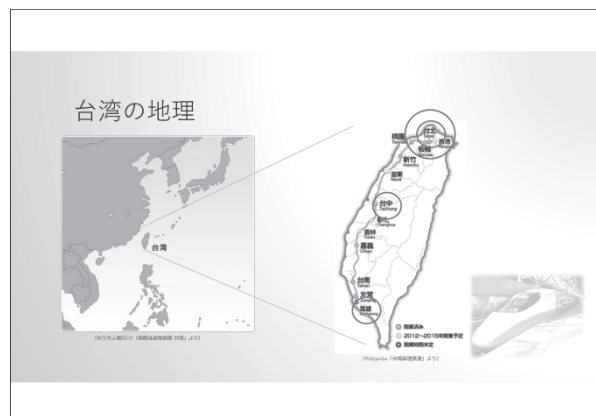


台湾図書館研修2017 概要

- ・ 期間：2017年9月13日（水）～9月16日（土）（3泊4日）
 - ・ 企画・実施：近畿日本ツーリスト
 - ・ 企画協力：丸善雄松堂・図書館総合展運営委員会
 - ・ 参加：29名
- (内訳：大学図書館員14名[内丸善図書館サービス6名]・大学勤務3名[教員含む]・専門図書館員1名・システム会社5名・事務局7名)

台湾図書館研修2017 訪問先

都市名	訪問先
台北市	(1)台北市立図書館北投分館 (2)誠品書店敦南店館 (7)国立国家図書館 (8)国史館 (9)台北市立図書館松山機場智慧図書館
台中市	(3)国立公共資訊図書館
高雄市	(4)高雄市立図書館総館
新北市	(5)新北市立図書館総館 (6)国立台湾図書館



ないと思うので、こんなところですよという概略だけ提示します。八重山諸島の西側にある島ですね。スライドで大きく台湾本島を表示します。台湾の地理ですが、西側に平地が多く、大都市があり栄えています。新幹線も通っています。この新幹線は日本の技術で導入された新幹線で、内装はそっくりでした。学生のみなさんにも台湾は旅行先として人気でしょうか、最近では西側だけではなく、特に東側のほうで花蓮とか、台東あたりも注目されているようです。ご覧の通り、今回行ったエリアは西側が中心です。各都市の概要です、まず台北、台湾のいわゆる首都にあたります。次に、その台北の周りに、昔は台北県（たいほくけん）と言っていたらしいのですが、新しい市として新北市というのができています。そして台中、高雄と南下したり、ということになります。一日で台北から台中に立ち寄り更に高雄を訪れて日帰りで台北に戻って来る、みたいな強硬スケジュールの日もあったので、行程的にはちょっと大変でした。

帰国後に興味が沸いたので、調べておかないといけないあと考え、改めて歴史的な背景を確認するために資料を読みました。ご存じだと思いますが台湾は、中学の社会レベルで習ったでしょうか、1895年に日清戦争が終わって下関講和条約で日本に割譲された地域ということになります。よく台湾は親日的だ、みたいに話されますけれども、単純にその程度で収めてはならないような背景もあります。植民地化に対してはやはりま

日本統治と台湾の図書館

- ・ 1895年：日清戦争後の下関講和条約で日本に割譲
- ・ 1901年：「台湾文庫」の設立
- ・ 1914年：「台湾総督府図書館令」の公布
→1915年：台湾総督府図書館開館
- ・ 1923年：「公立私立図書館規則」の公布
→1923年：台中州立図書館、1925年：高雄市立図書館、1930年：台北市立松山図書館
- ・ 1928年：台北帝国大学の設置
→同時に台北帝国大学図書館が開館
- ・ 1931年：満州事変、1937年：日中戦争、1941年：太平洋戦争、1945年：日本の敗戦

ったく平和裏に行われたということではなく、台湾でも抗日運動はありましたし、武断政治、武力を背景にして植民地化を進めていった背景はあります。その一方で、後藤新平がインフラを作っていた。建物を作ったり、道路を拡張したり鉄道を敷設していったりという、両面で進めていった。そういう社会教育の中で図書館というものも存在していったということのようです。現在の図書館のはじまり、台湾文庫というのが1901年に、民間レベルで設立されたというのがはじまりかとされており、そこから展開していったようです。少しとんで1914年に、台湾総督府の図書館令というものが交付されて、その翌年に『台湾総督府図書館』というのが開館されたのが、台湾の公共図書館の大きな流れの始まりということになります。勅令として出されたものに対して、この図書館ができたのですが、基本的には台湾の参考図書館であるということ、および、南進政策、南進南洋政策ということで、日本が南に向かってどんどん侵略を進めていく中で、そのあたりの資料を集めていくための図書館だったということのようです。1923年のところに、「公立私立図書館規則」の公布のことが書かれていますけれども、ここで更に台湾の中で図書館の設立運動を進めていこうということで、これも勅令が公布され、このころ、例えば1923年に台中州立図書館、1925年に高雄に図書館ができた、ということになります。このころに州立や市立というレベルで、だいたい100くらいの図書館ができたという資料に書かれておりました。このころできた図書館を前身にして、現在も続いているものもあり、それも見学対象でした。その後として1931年くらいのお話を書いていますが、満州事変がおこって日中戦争が始まってということで、日本でも国民精神総動員運動という方向で、日本の図書館自体も政治体制に協力していくかたちになります。そして最終的に1945年の終戦を迎える。公共図書館の本質を失ったといわれる時期ですけれども、そういう流れの中を概観してみました。

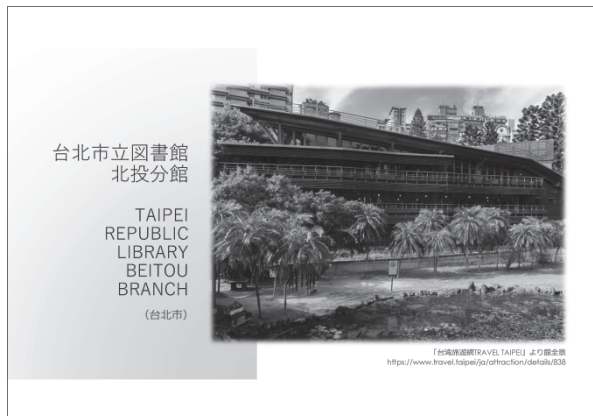
歴史からまた現代に戻ります。現在の台湾の図書館をとりまくトレンドということで、これは研修に行く前に事前にもらった資料からの抜粋で紹介します。台湾は今、民主化され、蔡英文という女性の総統がおります。そんな中で、台湾の国立図書館、先ほどの1914年、15年にできましたという図書館が100年をちょうど迎えたということで、国際シンポジウムが展開されていたということ。また、あと、建築の視点では、「グリーン建築」とどこ行っても言われる。なんだろうと思っていたのですが、台湾の建築物では、ある程度、確か8億円だったと思います、という金額を超える建物に関しては、この商標を確保し、国からの許可をとらなければいけない、それにパスしているかが重要であるということでした。あと、町なかの図書館、「智慧」図書館です、ちょっと難しい漢字ですけどこれは後ほどお話します。うしろのほうにうすい絵で表示していますが、ファミリーマートのマークが見えますか？その横にあるハートのマークはハイライフという、台湾の国内コンビニですが、こういうところとの異業種交流、具体的にはコンビニで本を借りたり、コンビニで本を返したりできるようなことをしているということが挙げられます。あとはデジタルアーカイブの取り組みなどもされている台湾華文電子書庫 Taiwan eBook、これは図書館が主導して行われているようです。最後に、おしゃれで洗練された書店がありますよというような話をします。

台湾の図書館をとりまくトレンド

- 国立台湾図書館開館100年（2014年）国際シンポジウム実施
- 総館を中心とした「グリーン建築」
- 街中の図書館「智慧図書館」
- 異業種連携（コンビニでの受け取り・返却）
- デジタルアーカイブへの取り組み
「TELDAP」「台湾華文電子書庫Taiwan eBook」
- 洗練された書店

台湾図書館研修2017事前説明資料より（台湾図書館研修事務局）

では台湾の図書館を紹介していきます。まず一つめは、台北市立の図書館で、『北投（ Beitou）図書館』というふうに読みますけれども、台湾の首都である台北市にある図書館ですね。台北の市立図書館としては中央館は別にありまして、こちらは分館として展開されています。ここの紹介の中心としては、「おしゃれ図書館」「エコロジー図書館」といった位置づけでした。中身というよりも、建築に対して、図書館界で非常に注目されているものだというようなところでした。



2006年にできた建物です。開館時間とかフロア展開とかは普通ですね。グリーン建築ですよと、向こうで何度も聞いたグリーン建築という言葉ですが、具体的には木造のエコ建築だったり、太陽電池とか、雨水回収システムがありますと強調していました。また台北の図書館は、分館ごとにコレクションが決まっているらしく、この館はグリーン建築の図書館に合わせるように、「生態保育」というのをテーマにしているということでした。更に「世界で最も美しい図書館25」という、

台北市立図書館北投分館

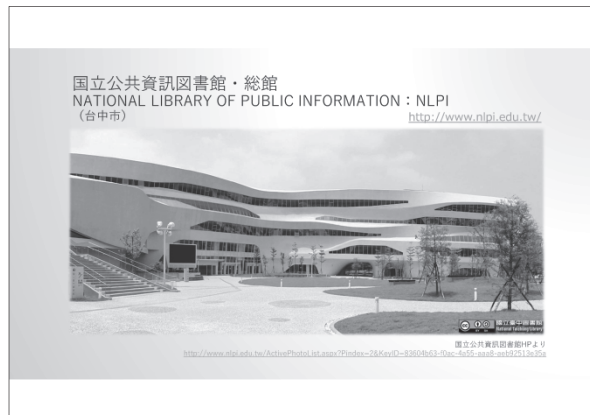
設立	2006年
住所	台北市北投区光明路251 台北市内から北側約10km程度にある北投区の温泉街に位置し、伊東や熱海のような温泉街の中に存在する。近隣に「温泉博物館」あり。
主な開館時間	月～日 8:30～21:00
フロア	B1F-2F：利用者エリア
備考	<ul style="list-style-type: none"> 「グリーン建築」外観が木造のエコ建築、太陽電池や雨水回収等（台北市立図書館総館は市街地にある11フロアからなるビル） 台北市立図書館は分館毎にテーマを決めたコレクション（館蔵特色）をしており、北投図書館では「生態保育（Ecological Conservation）」。また寄贈を受けた「緑建築図書」文庫もあり。 2012年には米国のウェブサイト、「Flavorwire.com」によって、「世界で最も美しい図書館25」の一つに選出された。
公式広報物の日本語対応	リーフレット・ホームページとも有

米国の Flavorwire.com というサイトがあるらしいのですが、それにも選ばれたということです。みなさんのお手元の資料に掲載してないですけど、スライドで写真を少し用意していますのでご覧いただければと思います。見た目の印象としてはやはりおしゃれ図書館ですよ。木の調度品や内装に工夫が凝らされている印象です。外から見えるのは、ここ温泉地なのですが、この種の亜熱帯の植生で、日本人としては多少アンバランスな感じも受けましたが。通常屋上には入れないのですが、我々には見学させてくれて、ソーラーパネルとか、ここから雨水を集めて館内のトイレとかで使ってますみたいな感じのつくりを説明頂きました。ただ雨を集めているせいなのか時期や気候なのか、やや蚊がいた印象があります。図書館のまわりに。因果関係は不明ですが。

二つめの見学館は、『国立公共資訊図書館』です。「資訊」はズーシンと中国語で読むらしいんですけども、英語でいうと information ですね。中国語、みなさんのほうが詳しいかもしれませんが、「情報」という単語は、向こうの人の説明では「機密寄りの情報」をさしているということで、例えば軍事的なものに対しては情報と使うんですが、information、つまり図書館で使う「情報」は、この「資訊（ズーシン）」という言葉を使うとのことでした。ここも特徴的な図書館として、グリーン建築であることを強調していました。

1923年の台中州立図書館が前身ということで、歴史的な背景で見ると、日本統治下の政策の中でできた図書館が前身となります。台中市にあり、建物自体は2012年設立です。開館時間も公共図書館としてはこんな感じでしょうというレベルです。しかしフロアは非常に広大で、4万㎡くらい。今、

立教大学池袋図書館が1万9千㎡なので、立教もかなり広いですが、それでもその倍以上の面積を持つ図書館でした。所蔵も133万冊、対して池袋図書館は108万冊くらいですけれども、更に電子資料については250万点あるということで、これは本当にびっくりしましたね。どんな種類の資料、どんなタイトルを利用できるのだろうと疑問を持ちましたが、残念ながら詳しいところまでは聞けませんでした。この図書館の重要な役割ですが、組織として研究部門を持っており、国内の250館程度ある公共図書館に対する企画・運営補助・カウンセリングの役割を有し、リーダーシップをとっている図書館であるということです。話を聞くと、台湾の図書館員には、研修が何年かに一回、義務化されているということで、必ず受けなければならない、その種の指導もしていたりするということでした。研修については帰国後の歴史資料にも記載されていたので、日本の図書館、日本の統治時代から続いているものなのかという疑問が、後から湧いてしまいました。またお手元の資料に出てない写真なので見てください。これは資料の返却システムですね。返却ボックスの投入口のようなものがあって、そのなかの部屋がガラス張りで丸見えになっている作りです。RFIDを使い、



国立公共資訊図書館・総館	
設立	1923年設立の台中州立図書館が前身。現在の建物は2012年に完成（1923年「公立私立図書館協賛」の交付の年に開館）
住所	中市南区五權南路100号 台湾の中部である台中市（人口280万人）にある、台湾内三つの国立図書館のうちの一つ
主な開館時間	火～日 平日：9:30～21:00
フロア	地上5F・地下2F建；B1F～5F利用者フロア（地下2Fは駐車場） 延床面積41,797㎡
備考	<ul style="list-style-type: none"> 「資訊（ズーシン）」はinformationの意味。 所蔵冊数133万冊、電子資料が250万点 組織として研究部門を有し、また公共行政法人として国内520の公共図書館に対する企画や運営補助（カウンセリング）の役割も担う。
公式広報物の日本語対応	パンフ・ホームページともなし

返却投入された資料をベルトコンベアに乗せ、その当該の資料が配架されるべき書架のブックトラックのところまで運ばれるというものでした。またここにフクロウのキャラクターロボットくんがご覧いただけると思います。通常、書架へ運ぶのは人間の手で動かすブックトラックなのですが、このフクロウロボット君は児童書エリアへの返却用のロボットらしく、これだけは、児童書エリアまで自走して行って、子どもが、あ、ロボット来たとか言ってキャーキャー言うそうなのです。興味深くおもしろかったです。更に、ディスプレイコーナーへの対応も非常に充実していました。パソコンの写真の手前側にあるのは、点字ディスプレイです。点字ディスプレイ自体を有する図書館も日本ではそう多くはないと思いますが、その規模が違う。20台くらいのこのディスプレイシステムがあって、更に4、5台の点字プリンタが置いてあったりする。またこの写真の書架も、すべて点字の絵本、子ども向けの点字絵本の展開です。ちょっと規模感が違うなというところでした。また多元文化と表現されていた、「多文化」ですね、いろんな国の文化や言語を紹介するエリアがかなりありました。ここの写真でブリティッシュカウンシルがあったり、ちょっと見えないですね「美国（アメリカ）」とサインがある、アメリカのエリアもあったりする。こちらの小さい写真は海外の留学に対する棚ということで、日本の棚もありました。探してみたのですが、「R」の棚の写真で、見えますかね、あるかなと心配したのですが、ありました立教大学。びっくりしたのは立教だけじゃなくて、例えば「R」では立命館、麗澤、立正、ほとんど日本の大学を網羅しているようなかたちで資料がファイリングされている。この種の海外文化や留学のための資料の充実ぶりには本当に驚きました。

三番目は、高雄の図書館です。南側に下っていきました『高雄市立図書館』。これもおしゃれな建物ですね。建物自体の自慢を最も受けたかもしれません。こちらが1925年の高雄市立図書館が前身となります。高雄市自体が非常にダイナミックな街で、台湾でも今最も変貌をとげている都市だ、ベイエリア開発でいろいろなものができている、という中のひとつの建物でした。こちらがグリーン建築だよという話ができました。あとこの館は寄付が多い。高雄という街がそのような性格を持っているのかどうかは不明ですが、寄付の額が非常に凄いということです。こちらに「募新書百萬 傳愛智代代」みたいなテーマが書かれています。これから先に向けてどんどん知識を伝承していこうという意味らしいんですが、その他にも、この写真見ていただくと、入口に大きく「華立廟」とレリーフがあります。我々が話を聞いた会議室で、「廟」はホールの意味で華立ホールということのようですが、「華立」はなんですか、と聞いたところ、寄付してくれた会社の名前だという。寄付をくれた会社に命名権を与え、その名称を壁一面に、華立ホールというレリーフで施している、他にも「光陽館」「王礼館」など2、3ホールありました。さっきの「募新書百萬」



高雄市立図書館・総館	
設立	2015年（正式開館） 1925年の高雄図書館（市立）が前身
住所	高雄市府前區新光路69号 台湾の南部の港湾都市である高雄市（人口280万人）の市立図書館。 高雄自体が「アジアニューベイエリア」として、公共施設や新たなライトレール敷設を計画するなど、ダイナミックな変遷のタイムングにある。
主な開館時間	月～日 9:00～21:00
フロア	地上8F・地下1F建：RFあり B1Fと3F～5Fが利用者フロア（1Fはピロティ、2Fは一階商店）
備考	<ul style="list-style-type: none"> • 懸垂型建築構造と「グリーン建築」 • 蔵書73万点 • 寄付による施設・資料：「募新書百萬 傳愛智代代」という寄付運動
公式広報物の日本語対応	リーフレット有・ホームページ無

というのも、ここ写真にあるとおり本の上のところに「冠名権」のようなシールが貼っていて、中にはこれほどそこの会社からもらった本ですよ、と紙が貼付されて配架されている。これが、ここの図書館は大きな特徴的でした。あと、どの館もそうだったんですが、子ども向け、「児童区」と書いていますが、この子ども向けのエリアが非常に充実している。日本では、ちょっと申しわけ程度に公共図書館の一部のエリアが児童コーナーだったりしますが、それとは規模が全然違う。この館では例えば地下一階がすべて「国際絵本センター」という名前で展開していて、全部が児童用の図書です。中には日本の絵本のコーナーもあって、その充実ぶりは圧巻でした。この写真は絵本ではない書架で、ちょっと字は読めないですけども日本の本です。もちろんこれは一部ですけども、児童書の蔵書が非常に多かったことは特筆できます。この写真は子供向けの自動貸出機のようなもので、このような設備にも、児童コーナーのあり方の工夫が見出せる運用でした。

四番目は『新北市立図書館』です。これは台北の衛星都市、ベッドタウンにあたる新北市にある図書館ですけども、建物としてはこれが1番新しい図書館でした。2015年の5月に完成し、2015年の時点で図書館総合展でも日本で紹介されている図書館だそうです。ここの特徴は24時間開館です。とにかく24時間押しでした。建物としては9階建て10階建てくらいの建物でしたが、24時間エリアは1階と4階に限っていました。そのフロアにはなにがあるのかというと、1階は入口なのでよいですが、4階は「自修室」という名称で展開されるフロアでした。この「自修」、しゅうの字は修っていう字ですけども、ほとんどの公共図書館にありまして、要はコンセントや照明を備えた机が置いてあるような学習スペースエリアです。ここを24時間開放していると。その他のフロアは21時までということでした。24時間の利用状況はどうですかとい



新北市立図書館総館	
設立	2015年5月に完成
住所	新北市板橋区貴興路139号 新北市は台北市の北に位置するベッドタウン、人口は約400万人と首都台北市(300万)より多い
主な開館時間	月～日 1Fと4F: 0:00～24:00 (24h) 他フロア: 8:30～21:00 1Fカウンター (貸出・返却)、4F自修室、雑誌架、書架
フロア	B1-B3: 駐車場 1F-9F: 利用者エリア 10F: 事務室
備考	<ul style="list-style-type: none"> 「あなたの読書の家」グリーン建築 「Slow Reading」世界の窓コーナー7部屋 24時間全自動予約貸出サービスシステム 社会教育施設の意味合いを持つ 高度なユニバーサルデザイン
公式広報物の日本語対応	リーフレット有、ホームページ無 (英語も予約システム以外に無?)

う質問には、けっこう使われているという回答がありました。台湾は国家試験的なものも多かったりするので、7月とか12月とか非常に混雑しますという話もしていました。社会教育施設の意味合いも強くて、まあ図書館自体がもちろん社会教育施設ですけども、かなり会議室だとか集会エリアみたいなものが充実し、そういう意味では公民館的な役割も果たしているということ、職員の方が言っていました。24時間図書館の施設なので、建物内にも入れるのですが、建物の外にも「24時間予約貸し出しシステム」があります。この館からでも台北市内のネットワークを使って台北市内の図書館からでも、借りた資料をこの裏にコンテナエリアに設置し、24時間いつでもここから貸し出しができるという、仕組みの設備でした。eBookの話少し触れましたけれども、ここは1番オーバーに展開していたというか。大きな60インチぐらいのディスプレイが3つほど並んでいて、ふわふわ電子図書が浮いているような感じで表示されています。ディスプレイにタッチすると、その資料がポップアッ

プしてきて、表示されたQRコードからコンテンツをダウンロードできるような仕組みがありました。他にもいろんな施設や設備がありましたね。社会教育施設みたいだというお話しでしたが、ゲームエリアみたいなのがあって、Xboxまで置いていてちょっとびっくりしました。高校生などがけっこう使っていると言っていました。

いくつかの館を紹介していききましたが、だんだん何個も紹介していくとどの館のどの設備だったからわからなくなってくるものがあるのですけれども、実はもう、見学している時点でもわからなくなりつつあり、この写真の『国立台湾図書館』のころは、時間もそもそもなかったですけれども、個人的にあまり記憶がないのです。ただこの図書館は先ほどの紹介でもありましたが、台湾で最も古い図書館ですね。1914年にできた国立台湾総督府の図書館を起源とするということになります。当然もう建物は違いますが、台北市内ではなくて新北市にあるということも面白いです。所蔵資料として歴史的に日本の資料が多い、ということでしたけども、詳しいことはこれまたあまり聞けなかったです。広いフロア展開だなあとというふうに見ていましたけれども。あと「本の病院」みたいな部門があって、その見学でかなり時間を要してしまいました。参加者の図書館員の人達は、こういうのが非常に好きで、私はもっと違うところを見たいなと思っていたんですけど、ここで見学時間の半分を費やしたような感じでした。

次はいよいよ大学図書館、『国立台湾大学図書館』です。ここで今注目されているのはこちらの写真の、「社会科学系図書館」という新しい館です。デザインが奇抜ですごいです。反対側の写真が「本館」のほうですね。この二つの館を見てきました。設立は1928年、先ほどの説明では紹介を飛ばしたような気がしますけれども、国立台北帝国大学、日本の帝国大学として7番目の大学として展開されていた頃にできた大学で、同じタイミングで図書館ができていたということです。新しいほうの社会科学系図書館は日本の設



国立台湾図書館
NATIONAL
TAIWAN
LIBRARY
(台北市)
<http://www.library.ntpc.gov.tw/>

国立台湾図書館	
設立	1914年 「台湾総督府図書館」公布で開館。現在の建物は2004年完成
住所	新北市中和区中安街85号 台北市ではなく新北市にある。
主な開館時間	月～日 8:30～21:00
フロア	B3F～6F: 利用者エリアB1F～6F
備考	・最大の国立図書館。歴史的に日本関係資料の所蔵が多い ・「台湾学研究センター」「本の病院」「障害者資料センター」など付設
公式広報物の日本語対応	リーフレット不明、ホームページ有



国立台湾大学図書館
NATIONAL TAIWAN UNIVERSITY LIBRARY
(台北市)
<http://www.lib.ntu.edu.tw/>

辜振甫先生記念図書館
社会科学系図書館 / KOO CHEN-FU
MEMORIAL LIBRARY

総図書館
MAIN LIBRARY

伊藤亜由美氏(2011)撮影
http://www.tcu.edu.tw/WWW/Project_Descript/2010-2010-p.11/2010-p.11.html

国立台湾大学図書館	
設立	1928年 中央図書館は1926年。社会科学系図書館は2013年の竣工。 社会科学系館は日本の伊藤亜由美氏が、室内仕様は藤江純子の設計。
住所	台北市羅斯福路4段1號 広い。
主な開館時間	月～日 8:00～22:00 おそらくはほぼ365日開館(サービス停止日でも、自修室の開放がされている模様)。
フロア	社会科学棟: B1F～2F 本館: B1F～5F
備考	学生数: 学部生約16,000人、大学院生約15,000人 教職員数: 4,000人 50以上の学科 他に大きい館では、医図書館と法律学院図書館、また各学系図書館も存在
公式広報物の日本語対応	リーフレット有・ホームページ無

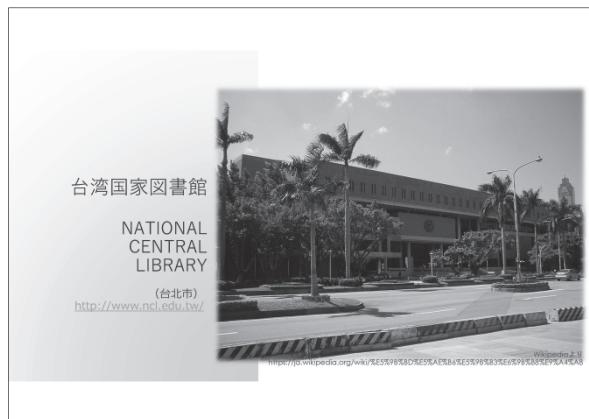
計者とかデザイナーが設計していますということでした。キャンパスは非常に広く、とても全部は歩けないなというくらいです。ここはおそらくなのですけど 365 日開館です。24 時間ではないですけど、必ず開いている。閉館日もあるのですが、先ほど申し上げた自修室のようなものがこの大学図書館にもあって、自修室だけはどうやら開いているようです。正月でも、台湾は旧正月なのでしょうか、その期間でも開いているようです。大学としての規模は三万人くらいなので、立教の 1.5 倍くらいですけども、大学院生が多い研究大学ですね。50 以上の学科があるということです。この写真は社会科学棟の中ですね。中もおしゃれです。森の中の、森の上から日差しが降りてくるようなイメージということで、書架も婉曲になっていて、森の中を回遊するような感じ。サービスも、サブジェクトライブラリアンが設置されていたり TA による学習支援を受けられたりなど、その展開についていろいろ説明を受けました。開館時間は 22 時までなのでちょっと早いかなと思ったのですが、やっぱり利用者からは、もっと長く開館してくださいということが一番多い要望だということです。この図書館を見て感じたことは、建物は新しくて非常に素晴らしかったのですが、全体的にそれほど突出して立教が負けている感じがしませんでした。必ずしもというか全然、言うなれば遜色がないなあというか、立教が勝っているところも多いなという印象を受けましたね。

こちらの写真は古いほうの建物です。本館と、「孔子館」という、今の立教でいうと立教学院展示館のような、旧図書館のエリアでした。見学に行って嬉しいのは、やはり普通の利用では入れないところに入れてくれるところで、貴重書室に入れてもらえました。この写真の文字、見えますかね、「琉球資料」と表示されています。台湾は琉球資料が非常に充実しています。そもそも沖縄の資料は沖縄が接收された際に、東京のほうに全部資料を接收されて、更にそれは戦争で焼失してしまったみたいない時期がありますので、琉球資料がこのように網羅的に存在しているのはこの図書館が唯一なのではないかと言っていました。ただ 20 年も経っていないような建物なのですけど、老朽化だとか狭くなりましたみたいなことを言っていて、えーもうそんな？と思いましたが、それに対して自動書庫の導入を計画しているとも。自動書庫準備室の張り紙をよくよく見ると「日方 NF」の控え室みたいな感じで、立教にも自動書庫を導入している日本ファイリングという会社が、入っている。台湾で初めて自動書庫を入れるとのことで、今 2018 年に向けてやっているみたいです。古い建物も多く、この写真は図書館学科棟ですね。キャンパスも広いですよ、ずっと奥までキャンパスのエリアです。この写真は就活ポスターでしょうか、日本の企業に就職しようということで日本の会社のリクルートな感じのポスターが貼ってありました。

次です。『台北市立図書館松山機場智慧図書館』。智慧図書館ってなんでしょう、ということですが、これも英語を見ればわかります、“Intelligent Library”と表示されています。冒頭で台北市立図書館、北投の図書館分館の話をしたけれども、こちらもその中で分館で、智慧図書館というくくりで松山機場にあるもの。松山機場というのは、羽田空港ですね、日本でいうところの。智慧図書館、インテリジェントライブラリーだということで、何がインテリジェントかということ、無人図書館なのです。これはびっくりしました。



場所的なイメージとしては、池袋のエチカの中に図書館があるみたいな感じで、広さ的にも、ちょうどエチカのはなまるうどんくらいの広さが図書館エリアだと考えていただければわかりやすいかなと思います。そしてカードを作れば誰でも入れますよ、と。カードってなにか？というところ図書館カードの他にもあります。これは私が作ったとカードの写真なのですが、いわゆる台湾の Suica です。Suica を作ればそれで入館できますよという。そして、実際これでドアが開きました。え、これだけで開くのだと思って。この Suica は特にパスポート提示とかせず匿名的に作ったのですが、それでも開くという。驚いた一方で、セキュリティ的にどうなのだろうと思いましたが、「悠遊カード」という名称で民間の会社が展開している、台湾で 7、8 割のシェアを持つ交通系のカードようです。これを使って、もちろん中にある自動貸出機、外にある返却機を使える。台湾も日本同様に、予算が不足しているとか図書館員の人材が不足しているみたいな話もありましたので、そういうことの改善のためということでした。場所も、公的な場所ではなくて民間のエリアを借りながら展開しているそうです。



後はツアーのコースではなかったんですけど、ちょっと時間があつたので行って見た、台湾の『国家図書館』というところです。台湾には三つの国立図書館があり、その中の三つめです。ひとつは国立台湾図書館、もうひとつは台中の資訊図書館なのですが、これだけちょっと毛色が違ってきます。というのは、もともとは国民党政府が南京に作っていた図書館で、1954年くらいに台湾に移ってきたものです。つまり日本が作った図書館が前身ではない館です。確認不足ですが、他の国立の台湾の図書館との関係性とか役割分担とか不明で調べきれていません。ちょっとエンドユーザー寄りかなと感じたりしましたが、冒頭で話した eBook の企画・計画などはこの図書館が中心となり展開していたり、あとは台湾の大学の修士論文と博士論文、台湾の中でのリポジトリ展開をこの図書館が担っている



ということがあるようです。開館前、朝9時前の訪問だったので、中までは入れず、ロビーから覗いて無理矢理写真だけ撮ってききました。ところが開館前なのに、反対の入口で、高校生らしき人々が、どんどん入館していくエリアがありました。なんだろうなと思ったら、また「自修室」でした。自修室を図書館が提供する役割という意味が強いなど、ここに至り強く感じました。図書館自体は9時からの開館なのですが、自修室だけは8時からやっていますとチラシに書いてありました。自修室に入るにはカードを使って入るようでした。座席も、座席予約システムでピッとタッチしながらでした。

この写真は、中村先生から紹介していただいた方がいらして、そこの方が勤めている『国史館』という台湾のアーカイブセンターのようなところですね、というところも行ってきました。

施設の紹介としては最後ですが、台湾の書店も見てきました。『誠品書店』というところの、ある支店に行ってきましたが、おしゃれ書店ですね。この書店は蔦屋書店が参考にした書店だというふうに言われています。本当かどうかかわからないですが、蔦屋「を」ではなく、蔦屋「が」、台湾のこの書店を真似した。真似したというか、お話によると同じようなコンセプトで作ったみたいに行ってきました。日本にも展開する可能性があるとも



も言っていました。図書館も同様でしたが、書店も品揃えとしては、日本の図書や雑誌が非常に多かったです。台湾人は本読まない、みたいな話を現地のガイドさんが言っていたのですが、図書館でもこの書店でも、絶対そんなことないよなという感想をもちました。ただこれ地べた座りですね。この写真はほかのホームページから参照しているのですが、まさにこんな感じでした。せっかくなので本を買ってみました、2冊。本当は今日人が少なければ現物を回覧しようと思ったのですが、できずにすみません。まず漫画『ONE PIECE』台湾版の最新刊 86 巻を買いました。発売の時差はちょうど一か月ぐらいいかなというところでは、日本で8月4日に発売されていた『ONE PIECE』が、9月5日発売くらいです。『ONE PIECE』ですが海賊版ではなく正式版です。あとはお笑い芸人の渡辺直美が紹介する台湾のガイドブックみたいなのも買ってみました。渡辺直美は台湾人がお母さんなので、現地でも有名ならしいのです。台湾は再販制度がないらしく、新刊のほうを安価に売る。渡辺直美のガイドブックは320元とされていますけれども、それが「79折」、これは21%オフってことらしいのですね、その価格で買いました。

まとめてみます。全体を通してなのですが、公共図書館は施設・サービスともに全体で同じ方向を向いている。類似性と書いていますが、国全体が同じベクトルで動いている。例えば多元文化。どの館にもありました。いろんな国を紹介し、いろんな国の資料を提供している。日本語を含む多言語資料の所蔵、各図書館のホームページやパンフレットに日本語での紹介の文章はあるかなと調べて

全体を通して：施設・設備・コーナー

公共図書館の施設とサービスの方向性に台湾全体での類似性
 ・多元文化の強調と充実
 （日本語を含む多言語資料の所蔵、海外の紹介や国別資料コーナーの充実）
 →日本の図書館の国内志向が浮き彫りになった印象

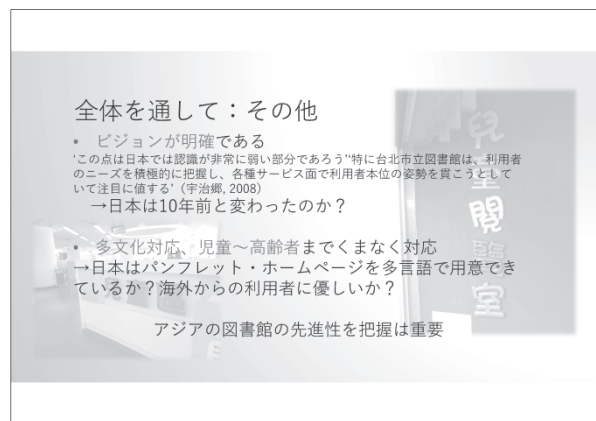
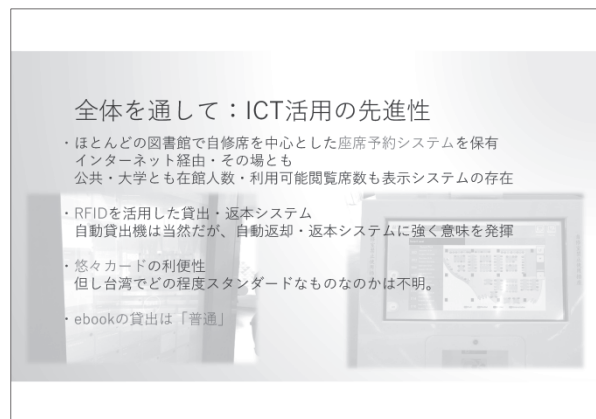
- ・先住民紹介や地域の紹介
アイデンティティとしてのコーナー設置？
- ・児童コーナーのエリアと資料充実と工夫
→日本の公共図書館の児童コーナーとの規模の違い
- ・障害者対応



資料に記載してみたのですが、日本語があるということは、逆にいうとそういうのに我々日本人側が甘えているところがありますね。反対に日本の図書館は、じゃあどういふかたちで海外に対して情報を提供しているのか、英語はいちおうあるけど中国語あるのか、韓国語どうかということ振り返ったときに、やっぱり日本の図書館は国内志向だと、その点が浮き彫りになった印象があります。更に、先住民紹介のエリアだとか、地域の紹介などが必ずありました。新北市だったら新北市、高雄市だったら高雄市の紹介 VTR。かなりの面積をとって紹介しています。台湾という国・地域を持つアイデンティティなのかなという感じも受けましたけれども。あと先ほども紹介しましたが、児童コーナーは本当に充実していました、びっくりしました。エリア分けも明確で、日本の公共図書館の児童コーナーが、新聞読んいでおじさんが椅子長いからってそっちのほうに出張って来てトラブルになるとかいうことは絶対はないという環境ですね。障害者対応も充実していました。この「無障壁」というアイコンはホームページに必ずついていて、1年に1回くらい、そのしょうがい者対応の施策に対し、おそらく認証されるような印のようです。

ICT の先進性も非常に印象深かったところです。ほとんどの図書館で自修室の話を出しましたが、自修室には必ず座席予約システムが提供されていました。この写真、薄く右側のほうに移っているのは大画面の座席予約システムです。インターネットからでも、その場でも予約できるということです。あとは入り口のところには「今何人入館しています」「今何席空いています」という紹介ディスプレイがあったりしました。RFID を使ったシステムがあったという話はしましたがけれども、やはり自動返却とか返本には強く意味があるなと思いました。悠遊カードのお話もしましたね。eBook の貸し出しも公共図書館レベルでは普通です。当たり前前に展開しているということでした。

ということで、全体的に見たときにビジョンが明確であるということは非常にはっきりわかる。2008 年に宇治郷さんという方が書かれた報告では、台湾と比較した際にビジョンが不明確であるということが日本の図書館の弱点だとされています。台北の図書館が、利用者のニーズを非常に的確に把握しているのを見たときに、日本はじゃあ 2008 年とかと比べて変わったかということですね。台湾はどんどん新しい図書館ができたり、サービスが充実するかたちで具現化して提供されている。多文化対応を児童から高齢者までくまなく対応しているという話をしました。一方、日本は英語のパンフレットすらおぼつかない館が少なくないですし、留学用に台湾の大学のパンフレットを公共図書館が置いているかという置いていないですよ、そういうところ。あとは海外からの利用者にも優しいかという点では、例えば台湾大学図書館はパスポート見せれば入れるそうです。誰でも入っていいですよということになっています。ただ見学するではなくて、「利用していいですよ」です。



立教大学の図書館にパスポート持ってきた学生、海外の学生が来たときにどうするか。だめです、外部の方は利用はできません、と案内するでしょう。おそらくそれは日本の大学ではスタンダードな対応であると思っています。図書館もダイバーシティを意識、とかいいますが、まだまだ口だけダイバーシティを脱却できていないと、日本の図書館を振り返り思いました。

最後におまけです。これもお手元の資料には載せていませんが、少し写真だけ紹介します。紫外線除菌器がすべての図書館に置いてありました。自動貸出機や新書紹介端末と、除菌機が並んで置いてあったり。下のほうの写真はヘッドフォンの除菌機です。なんだろう、除菌文化なのですかね。あとオブジェとキャラクターが非常に多い国でした。どうやら公共図書館、公共施設では予算の1%を芸術系のものに使わなければならないという決まりがあるらしいです。それにしてもキャラクターの種類は多種多様でした。この写真、あの黄色い10万ボルトを出すキャラクターに似ていますね。某ネズミのほうは図書館のキャラクターではなく、ちょっと街中で見つけたものです。この写真は日本文化、日本の資料ですね。漫画はどここの図書館にもありましたが、漫画の棚は、日本の漫画がほぼ、9割でした。ちょっと写真では見えないですが『棒球大联盟』＝『メジャー』ですね。下のほうは、『庭球王子』＝『テニスの王子様』だったり。DVDもちょっと版權どうなのかなあと思うものはあったのですが、『デスノート』とかいろいろ日本のアニメも置いてありましたし、雑誌のほうでは『non-no』とか、『趣味の園芸』とか書いていますね、そんなものがありました。フィギュアなんかも置いてあるディスプレイもありました。更に最後、図書館とは関係ない話。台湾大学の中で台湾リスを見かけました。日本にもけっこう台湾リスいるので、「外来種いっぱいいますね、日本と同じですね」って言ったらここは台湾ですって。そして衝撃的写真。高齢者のエリアのポスターに「55歳以上」って書かれていて、ええっ！と。現地のガイドさんは「年寄り年寄り」みたいに言っていて、「高齢者」って言ったほうがいいですよって伝えたのだけど、最後まで年寄りって言ってました。そしてその年寄り何歳だって言ったら55歳という定義で、衝撃でした。というところでした。

最後、マンゴーのかき氷の写真を出して終わりです、すいませんちょっと長くなりました。失礼しました。



質疑応答

(中村) でも、東大の図書館はパスポートで入れそうな気がするけど違う？国立大学と私立大学の差があるかなって思ったので。昔、東大の図書館に誰か連れて行ったときにすぐ入れてくれたような気がしなくもないな。すみません、ちょっと適当なこと言っています。では質疑応答に移りたいと思います。どうぞお願いします、どんな内容でも良いので。いかがでしょう。三者三様の話が。台湾のこのグリーンライブラリーというのは私の話の中で出てきた、サステイナブル図書館じゃなくてなんだっけ、と同じ話だよ。グリーンライブラリー、でも台湾のほうが進んでそうな日本より感じがしました。さあどうでしょう。何か質問。

(フロア1) 古賀先生にちょっとうかがいたいのですけれども、最後の Liberated Archives

Forum なのですから。IFLA しか私は知らないのですけれども、毎年こういうようなたちのものがあるのですか？ つまり何をお聞きしたいかっていうと、まあ今年トランプ大統領が誕生して以来、それはトランプ大統領だけじゃなくてトランプ大統領がああいうこと言ったらすぐ弾劾されるのだと思っていたらどうもそうじゃなくてアメリカでは同じような考え方をもち人がかなりいて、そういう政治状況社会状況をというようにことを反映してこういうようなものが特別に設けられたのか、それともオレゴンという州によるのか、というようにことをちょっとうかがいたいのですけど。

(古賀) 私は SAA 大会はまだ 2 回目の参加です、ただ私の理解の限りですと、今回は特別にこういう企画を設けたのではないかと思います。おそらくは SAA の執行部が、やっぱりちょっとこういった取り組みが必要だろうということで、今回はあえて執行部の考えでこういったものを設けたのではないかという気がいたします。あとは専門職としてはこういったことをやらないといけないということは感じましたけれども、ただ一方で専門職は専門職で活動しているけれども、アメリカ社会一般としてもおっしゃられた断絶・ギャップみたいなものもやっぱりあるのかなと思います。特にポートランドとかに行っても、やはりなかなか言いづらいのですけども、貧困層の人たちの姿をやっぱり街中でも目にしましたし、こういう専門職があったとしても、その声や活動が社会の中でどれだけ届いているかどうか、それはまた別の話なのかなと思ったりしました。ちょっと十分な答えになっておりませんが、そういうことです。

(フロア 1) はい、ありがとうございます。もう一点、ちょっと今度、中村先生になのですけれどもやはりその最後のエストニアの方でしたっけ、お話がありましたよね。それもやっぱり post truth とかというのがやっぱり今年になってからの話であって一過性かもしれない、たまたまそういうことが今あるので、危機感を持っていらっしゃるのはわからないではない。でもちょっとわからなかったのは、collection building から、ごめんなさい collection management から、中村先生は communication management…

(中村) ごめんなさい私なんか間違えて言っていた。

(フロア 1) connection management だとすると、そここのところのつながりを作っているという話であって、コミュニケーションを管理するという話とはちょっと違うのじゃないかと思ったのですが。

(中村) ごめんなさい、私がちょっと勘違いをしていたことに自分のレジюмеで気づきました、すみません。この私のレジюмеの印象に残るセッションの 5 番目のところにあっただのですけど、connection management って確かに言っていました。つなぐ、つながる、connection management なのかわからないけど日本の人もつなぐつなげられるライブラリアンの役割はつなげる役割だっていうのはわりと言いますよね。だからすみません、私はそれを単純に間違えましたすみません。他にいかがですか。はい。

(フロア 2) 原さんの発表で、国立台湾大学図書館が立教に負けている感じがしないとおっしゃっていたのですけど、そこについてもうちょっと具体的にうかがいたいと思ひまして、お願いします。

(原) 図書館自体は非常に新しいということがありましたけれども、台湾大学の図書館で展開していたサービスで、立教が展開していないサービスがなかったというところがありました。TA とかの話も本当は聞きたかったのですけれども、TA がどういう学習支援ができていのかは確認できませんでしたが、それは立教の 2 階にもラーニングアドバイザーがいるという話だとか、ラーニング commons のエリアも、施設の的にも新しいなと思ひましたけれど

も決して遜色はないなというところ。そうでない部分で座席の予約システムだとか、ディスプレイのシステムなどはありましたけれども、サービスとしての提供の比較では、やっていないものはなかったという意味です。すみません、うしろ向いていたのでどなたが質問してくださったのかわからなかったのですが、失礼しました。質ということではなくて、やっている展開の中では決して台湾大学図書館がやっていて立教がやっていないものはなかった、という意味でそういう印象を受けたということになります。

(中村) でも正直、そのサブジェクト・ライブラリアンがいて、日本みたいにサブジェクト・ライブラリアンどころかライブラリアンがいないような、いないかとも言えるべきかもしれない立教の図書館が負けてないっていうのはあり得るの？あり得たとすれば、それは図書館の要するにそのマネジメントとして、要するに何らかのこう、効率的にいろんなものを実現する要領の良さみたいなものは、日本のその官僚的な、事務職員というところもその中に含むようで、なんかちょっと悪口的に聞こえたらあれですけども、そういうつもりもないですが、そういう日本の図書館の人たちに会うと上手にこう、いろんなことを manage して運営していくのだなと思うのだけれども、やっぱりそのライブラリアンがさっきの Core Values の話とか、ある理想のもとにすべてのあり方をビジョンをもって進めていくっていうようなことっていうのをやっぱり専門職の世界はやっていると思うのだけれども、要するにそういうものじゃなくて、運営していくっていうマネジメントなのかなあ、その、要領がいいっていうことと、別の、見ていなかったかもしれないものがあるのではと云いたくなるのですが、どうですか？

(原) 台湾大学図書館だけは、事前に Q&A に答えてくれていまして、私の手元に資料があります。質問内容と回答を見ると、学習支援面において学部生に向けて院生にはしていないと回答される学修支援サービスの存在など、立教と同様・同程度の展開です。今、先生からサブジェクト・ライブラリアンの話なんかもありましたけれども、マネジメントという意味で学部学生に向けた学習支援を提供できているという意味でのサービスは、決して劣っているものではないなと思います。が、大学全体、図書館全体を見た際にこのマネジメントということで考えると、確かにご指摘させていただいているような部分というのももちろんある。その上手にうまくすり抜けているというふうな展開で、図書館を運営しているところはあるのかなと思いますけど、台湾の図書館もやはり予算がないだとか人がいないというような同じような悩みは抱えていたので、その中で日本と同様に、具体的にどういうことをマネジメントし進行しているのかは、本当はもうちょっと聞きたかったところではありますけれども、というふうな回答をさせていただきたいと思います。

(中村) はい、ありがとうございます。他にいかがでしょうか、いい質問が学生さんから出てよかったです。他にどうでしょうか。まだ時間あるって。

(古賀) どなたもおられないようでしたら私からも。私も中村先生の最後の connection management というか、そのあたりのリテラシーに関してのところをお聞きしたいというか、アーカイブズの立場からの補足というのも兼ねてお伝えしますと、SAA が最近力を入れているのが teaching with primary sources という言い方をしております。つまり一次資料、出版される前の文書などをいかに読み込んでいくかということを経営に入れたんことを促している。それも低学年からやっていって、文書がそもそもどういう意図で作られていたのかといったところも学んでもらおう、そのためにデジタルアーカイブも使ってもらおう、そういう取り組みなどをやっておりますけれども、今回 IFLA の中で情報リテラシー関係で、これは、という取り組みが何か他、ありましたでしょうか。

(中村) このさっき communication って言ったのには実はですね、この、実はここの絵の中にサークルがあって、ごめんなさい、印象に残ったセッションの (5) ってスライドってあるでしょう、この中にカラフルな矢印があるじゃないですか。これの真ん中に information literacy って書いてあるのですが、左下のところは茶色で problem solving なのね、その右側が communication なのですよ、その上に上がって紫色が synthesize って、まあ統合するっていうかそんな感じですよ、その上が technology でその左側の、なんかもう一回紫色っぽいのですかね、critical thinking っていうふうになっているのね。どこがはじまりと書いてあるわけでもないのだけど、私がそこで communication とちょっと勘違いして覚えたというか、理解してしまったので今さっき言っちゃったのだけど。information literacy をその矢印でとらえる、この矢印はかなりいい加減だなと思ったのね。problem solving, communication, synthesize, technology, critical thinking って、重要そうではあるけれども、これが矢印でつながるのかなっていうのは思って、だから彼女のその発表のその内容の提案の部分というのは、ちょっとまだ練り込まれてないかなって、さっきフロア 1の方が今年のフェイクニュースから出てきて、その要するに post truth 時代なんじゃないっていうのはちょっと読みがすごく、今年の話からぱっと反応して言ったようなところがもしかしたらあるかもなくて、ちょっとそれは甘かったですね。だから primary sources、一次資料の読み込みまで含めてインフォメーション・リテラシーの中に含めて行かないと、それこそ truth というものが真理を探究するって言ったときに、従来のその印刷物っていうものにかかれていたものは、ある程度正しいであろうという前提で議論してきた、そういう近代的な記録のシステム、記録っていうのかな、情報の世界の捉え方っていうものがもっと、もっと深い情報に対するつき合い方を向き合い方をしなきゃいけないってことが求められていて、それを教えなきゃいけないのだったという議論だったと思うけれど、そこで出てきたキーワードはわりとよく聞く problem solving, communication, synthesize, technology, critical thinking というようなレベル、レベルと言ったら悪いけれど、そんな話だった。だから古賀さんのその、teaching with primary sources っていう方が、インフォメーション・リテラシーを深めていくっていう意味では [議論の方向として] 正しいのかなって思ったりしますが、どうでしょう。すみません、あまりいい返事じゃないけど。いいですかね。他に何かありますか？どうでしょうか。最後によかったら。

(フロア 3) 古賀先生にお聞きしたいのですが、日本では今、学習院大学、筑波大学、九州大学でアーキビストを養成するプログラムがあるとおっしゃっていたのですが、これからの展望はいかかですかということと、あと SAA 組織みたいな団体がこれからできるかどうかということもお聞きしたいのですが。

(古賀) 後のほうからお話ししますと、日本のアーカイブズ関係の専門職というのは日本アーカイブズ学会が認定する資格というものが、数年前からいちおう動いてはおります (古賀注：2012年度から「日本アーカイブズ学会登録アーキビスト」が認定されている)。その認定資格を取った人がいろんなかたちでアピールをしていけばよいのですが、まだ社会的に認知が高いというわけではないという現状です。厳しい言い方をすると内輪の中だけで、私は認定アーキビストですということを言っている段階に過ぎない [つまり関係者の外へのアピールが十分できているか疑問がある] という状況なのかなという気がいたします。今後の展望として言いますと、私もちょっと申しあげた森加計問題の中でこういった仕事が必要だということがどれだけアピールできているのかなというところですね。今は公文書界限の規定をどうするのかという議論がどうしても中心になるのですが、そういう文書

や記録を扱う専門的な仕事が必要というところが認識されるかどうか。ただ私も大学とは関係ないところでも話をしていると、日本だとスペシャリストの待遇あるいはスペシャリストを育てるということへの関心がどうしてもうすい。これは原さんへの批判になるのですが、組織の中で着実に昇進していくためには、ジェネラリストというかたちでいろんな仕事をまんべんなくそつなくこなすということが評価されることになりますけれども、そういう中で日本で専門の仕事をずっとやって行くということが果たして社会的にどれだけ認められていくのか、そういう状況をなんとかしないといけないのかなと思っています。

(中村) まあ、私は専門職を信じているので、専門職倫理みたいなものがやっぱりないと、社会がある方向に行く時にそれに合わせてジェネラリストは働きますので、などというふうに私は思うのですが。さっきの森加計問題もみなさんどうぞ注目ください。授業でも言っていますけれども、図書館学におおいに関係があると思いますので。では今日はこのくらいで終わりにしたいと思います。みなさん、ありがとうございました。遅くなって、すみません。